豊橋市埋蔵文化財調査報告書第82集

西側遺跡（I）

ー牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書ー

2005年3月

豊 橋 市 教 育 委 員 会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第82集

西側遺跡（Ⅰ）

にし　がわ

－牛川西部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－

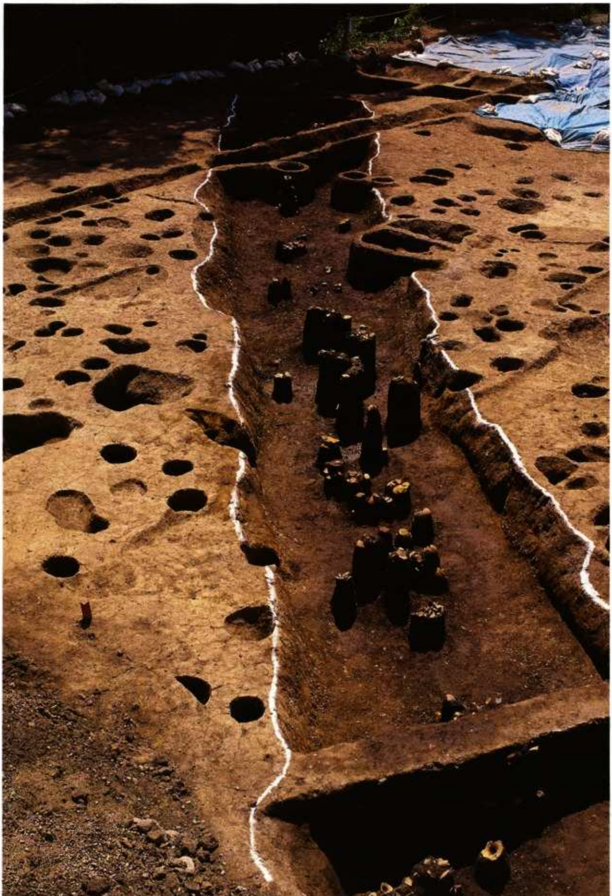
2005年3月

豊橋市教育委員会

１．Ａ区遠景（北半調査時・北から）

２．Ｂ区遠景（北半調査時・北から）

カラー写真図版２



ＳＤ－１全景（南東から）

1．ＳＤ－１遺物出土状況－１（南東から）

2．ＳＤ－１遺物出土状況－２（上から）

カラー写真図版４

１．ＳＫ－18銅鐸片出土状況－１（北から）

２．ＳＫ－18銅鐸片出土状況－２（上から）

1．ＳＨ－７（西から）

2．ＳＫ－17・18・21（北東から）

カラー写真図版６

ＳＤ－１出土弥生土器－１

13

30

ＳＤ－１出土弥生土器－２

カラー写真図版 8

49

148

73

187

93

188

ＳＤ－１出土弥生土器－３

例　言

1．本書は、豊橋市牛川町字西側地内において、豊橋牛川西部土地区画整理事業に伴い事前に調査した西側遺跡第1次発掘調査の報告書である。調査期間は平成14年7月1日～10月31日で、調査面積は3,550㎡である。

2．発掘調査は豊橋市教育委員会が行い、岩原　剛（教育部美術博物館）が担当した。

3．発掘調査に際して、事業主体者である豊橋牛川西部土地区画整理組合をはじめ、豊橋市役所区画整理課、および地元の方々のご理解・ご協力をいただいた。また資料調査及び報告書の執筆に際して、下記の方々からご教示をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。
伊藤厚史（名古屋市見晴台考古資料館）、鈴木敏則（浜松市博物館）、鈴木とよ江（西尾市教育委員会）、竹内尚武（豊橋南高校）、難波洋三（独立行政法人京都国立博物館）、林弘之（豊川市教育委員会）

4．報告書の執筆は以下のとおりである。編集、遺構・遺物の写真撮影は岩原が行ったほか、弥生土器の写真撮影は森下倫代（教育部美術博物館嘱託職員）が行った。
第5章1：難波洋三（京都国立博物館）
第5章2：齋藤　務（国立歴史民俗博物館）
第3章1、第4章1：贄　元洋（豊橋市教育委員会 教育部美術博物館）
上記以外：岩原

5．調査区に使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標系に沿うものである。なお、基準点の測量及び航空写真撮影、遺構の平面図作成は株式会社パスコに委託して行っている。

6．遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。

7．調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目　次

第1章　遺跡の立地と歴史的環境

1．遺跡の立地 …… 1
2．歴史的環境 …… 3

第2章　調査の目的と経過

1．調査にいたる経過 …… 6
2．調査の方法と経過 …… 8

第3章　遺　構

1．環壕（ＳＤ－１） …… 15
2．竪穴住居 …… 27
3．掘立柱建物 …… 34
4．柵 …… 46
5．井戸 …… 51
6．溝 …… 52
7．土壙 …… 54
8．遺物包含層（黒褐色砂質土） …… 68

第4章　遺　物

1．環壕（ＳＤ－１） …… 71
2．竪穴住居 …… 85
3．掘立柱建物・柵 …… 85
4．井戸 …… 87
5．溝 …… 89
6．土壙 …… 94
7．遺物包含層（黒褐色砂質土層） …… 102
8．表土 …… 102

第5章　西側遺跡出土銅鐸片の歴史的評価と分析

1．銅鐸の埋納と破壊 …… 116
2．西側遺跡・瓜郷遺跡出土銅鐸片の鉛同位体比測定結果 …… 142

第6章　総　括 …… 144

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（１／25,000）………1
第２図　遺跡周辺地形図（１／15,000）………2
第３図　周辺遺跡分布図（１／25,000）………5
第４図　調査区位置図（１／2,500）………6
第５図　調査区全体図（１／500）………7
第６図　遺構位置図－１（１／200）………9
第７図　遺構位置図－２（１／200）………10
第８図　遺構位置図－３（１／200）………11
第９図　遺構位置図－４（１／200）………12
第10図　遺構位置図－５（１／200）………13
第11図　遺構位置図－６（１／200）………14
第12図　ＳＤ－１断面図（１／40）………15
第13図　ＳＤ－１遺物出土状況図－１（１／20・１／100）………16
第14図　ＳＤ－１遺物出土状況図－２（１／20・１／100）………17
第15図　ＳＤ－１弥生土器出土状況図－１（１／20・１／100）………18
第16図　ＳＤ－１弥生土器出土状況図－２（１／20・１／100）………19
第17図　ＳＤ－１古墳時代遺物出土状況図－１（１／20・１／100）………20
第18図　ＳＤ－１古墳時代遺物出土状況図－２（１／20・１／100）………21
第19図　ＳＤ－１出土状況図－１（１／40）………22
第20図　ＳＤ－１出土状況図－２（１／40）………23
第21図　ＳＤ－１出土状況図－３（１／40）………24
第22図　ＳＤ－１出土状況図－４（１／40）………25
第23図　ＳＤ－１出土状況図－５（１／40）………26
第24図　竪穴住居－１（１／80）………28
第25図　ＳＨ－２・３遺物出土状況図（１／20）………29
第26図　竪穴住居－２（１／80）………31
第27図　竪穴住居－３（１／80）………32
第28図　ＳＨ－７遺物出土状況図（１／20）………33
第29図　掘立柱建物－１（１／80）………35
第30図　掘立柱建物－２（１／80）………36
第31図　掘立柱建物－３（１／80）………37
第32図　掘立柱建物－４（１／80）………39
第33図　掘立柱建物－５（１／20・１／80）………40
第34図　掘立柱建物－６（１／80）………41
第35図　掘立柱建物－７（１／80）………43
第36図　掘立柱建物－８（１／80）………44
第37図　掘立柱建物－９（１／80）………45
第38図　掘立柱建物－10・柵－１（１／80）………47
第39図　柵－２（１／80）………48
第40図　柵－３（１／80）………50
第41図　井戸・近世土壙断面（１／80）………51
第42図　ＳＤ－２土層図（１／80）………53
第43図　土壙－１（弥生時代、１／20・１／80）………57
第44図　土壙－２（弥生時代、古墳・奈良時代、１／20・１／80）………59
第45図　土壙－３（古墳・奈良時代、１／80）………60
第46図　土壙－４（古墳・奈良時代、１／80）………62
第47図　土壙－５（古墳・奈良時代、１／20・１／80）………63
第48図　土壙－６（中世前期・後期、１／20・１／80）………65
第49図　土壙－７（中世後期、１／20・１／80）………67
第50図　土壙－８（近世、１／20・１／80）………69
第51図　土壙－９（近世、１／20・１／80）………70
第52図　弥生土器小器種分類図………72
第53図　ＳＤ－１出土弥生土器－１（１／４）………75
第54図　ＳＤ－１出土弥生土器－２（１／４）………76
第55図　ＳＤ－１出土弥生土器－３（１／４）………77
第56図　ＳＤ－１出土弥生土器－４（１／４）………78
第57図　ＳＤ－１出土弥生土器－５（１／４）………79
第58図　ＳＤ－１出土弥生土器－６（１／４）………80
第59図　ＳＤ－１出土弥生土器－７（１／４）………81
第60図　ＳＤ－１出土古墳時代土師器（１／４）………83
第61図　ＳＤ－１出土古墳時代～中世土器（１／４）………84
第62図　竪穴住居・掘立柱建物・柵出土遺物（１／４）86
第63図　ＳＥ－１出土遺物（１／４）………87
第64図　ＳＥ－２出土遺物－１（１／４）………88
第65図　ＳＥ－２出土遺物－２（１／４）………89
第66図　ＳＥ－３出土遺物（１／４）………90
第67図　ＳＤ－２出土遺物－１（１／４）………91
第68図　ＳＤ－２出土遺物－２（１／４）………92
第69図　ＳＤ－３～８出土遺物（１／４）………93
第70図　ＳＤ－９出土遺物（１／４）………94
第71図　土壙出土遺物－１（弥生～古墳時代、１／４）………95
第72図　土壙出土遺物－２（古墳時代～古代、１／２・１／４）………96
第73図　土壙出土遺物－３（中世、１／４）………98
第74図　土壙出土遺物－４（中世後期～近世－１、１／４）………99
第75図　土壙出土遺物－５（近世－２、１／４）　100
第76図　土壙出土遺物－６（近世－３、１／４）………101
第77図　遺物包含層出土遺物（１／４）　103
第78図　表土出土遺物（１／４）………104
第79図　西側遺跡・瓜郷遺跡出土銅鐸片の鉛同位体比測定結果………143
第80図　遺構変遷図（１／1,000）………145

表　目　次

表１　西側遺跡出土寄道様式土器分類表………71
表２　遺物観察表………106
表３　銅鐸破片の出土例………118

表４　複数一括埋納された銅鐸の型式組み合わせ　……………………………………122
表５　西側遺跡・瓜郷遺跡出土銅鐸片の鉛同位体比測定結果　………………………143

カラー写真図版目次

図版１－１	Ａ区遠景（北半調査時・北から）	２	Ｂ区遠景（北半調査時・北から）
２	ＳＤ－１全景（南東から）		
３－１	ＳＤ－１遺物出土状況－１（南東から）	２	ＳＤ－１遺物出土状況－２（上から）
４－１	ＳＫ－18銅鐸片出土状況－１（北から）	２	ＳＫ－18銅鐸片出土状況－２（上から）
５－１	ＳＨ－７（西から）	２	ＳＫ－17・18・21（北東から）
６	ＳＤ－１出土弥生土器－１		
７	ＳＤ－１出土弥生土器－２		
８	ＳＤ－１出土弥生土器－３		

写真図版目次

図版１	調査区全景（モザイク写真・上から）		
２－１	調査区遠景（北から）	２	調査区遠景（東から）
３－１	調査区南側（上から）	２	調査区南側（南から）
４－１	調査区北側（上から）	２	Ａ区調査区北側（北から）
５	ＳＤ－１遺物出土状況－１（北西から）		
６－１	ＳＤ－１遺物出土状況－２（Ｒ－15区・北から）		
２	ＳＤ－１遺物出土状況－３（Ｒ－15区・南から）		
７－１	ＳＤ－１遺物出土状況－４（Ｓ－16区・北から）		
２	ＳＤ－１遺物出土状況－５（Ｓ－16区・北から）		
８－１	ＳＤ－１遺物出土状況－６（Ｓ－16区・北西から）	２	ＳＤ－１完掘状況（南東から）
９－１	ＳＨ－１（南から）	２	ＳＨ－２・３－１（南東から）
10－１	ＳＨ－２・３－２（南から）	２	ＳＨ－４（東から）
11－１	ＳＨ－５（東から）	２	ＳＨ－６（東から）
12－１	ＳＨ－６土器集中－１（南から）	２	ＳＨ－６土器集中－２（西から）
13－１	ＳＨ－７（北西から）	２	ＳＥ－１（西から）
14－１	ＳＤ－２土層（南から）	２	ＳＫ－17（北から）
15－１	ＳＫ－18（南西から）	２	ＳＫ－18銅鐸片出土状況－１（北から）
16－１	ＳＫ－18銅鐸片出土状況－２（東から）	２	ＳＫ－21（南西から）
17－１	ＳＨ－２・３遺物出土状況（東から）	２	ＳＨ－３遺物出土状況（北から）
３	ＳＨ－４貼り床断面（北東から）	４	ＳＨ－６土器集中－３（南から）
５	ＳＨ－７土層（南西から）	６	ＳＨ－７カマド周辺－１（北から）
18－１	ＳＨ－７カマド周辺－２（北西から）	２	ＳＨ－７遺物出土状況（西から）
３	ＳＸ－１遺物出土状況（東から）	４	ＳＸ－２遺物出土状況（東から）
５	ＳＫ－４（南から）	６	ＳＫ－４土層（南から）
19－１	ＳＫ－６遺物出土状況（東から）	２	ＳＫ－11遺物出土状況（東から）
３	ＳＫ－12遺物出土状況（北から）	４	ＳＫ－13遺物出土状況（南東から）
５	ＳＫ－14遺物出土状況（北西から）	６	ＳＫ－16遺物出土状況（東から）
20－１	ＳＫ－18銅鐸片出土状況－３（北から）	２	ＳＫ－18銅鐸片出土状況－４（東から）
３	ＳＫ－31（西から）	４	ＳＫ－31遺物出土状況（北西から）
５	ＳＫ－35遺物出土状況－１（東から）	６	ＳＫ－35遺物出土状況－２（北から）
21－１	ＳＫ－52（南東から）	２	ＳＫ－69遺物出土状況（西から）
３	ＳＫ－70遺物出土状況（西から）	４	ＳＫ－76遺物出土状況（東から）
５	ＳＫ－77遺物出土状況（東から）	６	作業風景（ＳＤ－１掘削）
22	出土遺物－１	23	出土遺物－２
24	出土遺物－３	25	出土遺物－４
26	出土遺物－５	27	出土遺物－６
28	出土遺物－７	29	出土遺物－８
30	出土遺物－９		

第１章　遺跡の立地と歴史的環境

１．遺跡の立地（第１・２図）

豊橋市域は、東は弓張山地、南は太平洋、西は三河湾、北は豊川に限られた地である。市域は広く、人口約38万人を数える愛知県東部の中核都市である。

東部の山地や北西部の沖積低地を除くと、市域の多くは豊川と旧天竜川によって形成された河岸段丘上にある。この河岸段丘は、高位面（天伯原面・標高30～60ｍ）、中位面（高師原面～豊橋上位面・標高15～30ｍ）、低位面（豊橋面・標高４～10ｍ）の３面に分けることができる。西側遺跡の立地する河岸段丘は牛川面と呼ばれ、豊橋上位面と同じ中位面に相当する。この牛川面は、台地の南端と北端が朝倉川・神田川の開析谷によって、また西端は豊川の沖積面と高低差10～15ｍの明瞭な段丘崖によって限られている。牛川面の特徴は、豊川の河岸段丘上に支流の朝倉川・神田川によって形成された扇状地性の堆積物が覆っていることで、比較的大きな礫を含んだ粒の揃わない砂礫層となっている。

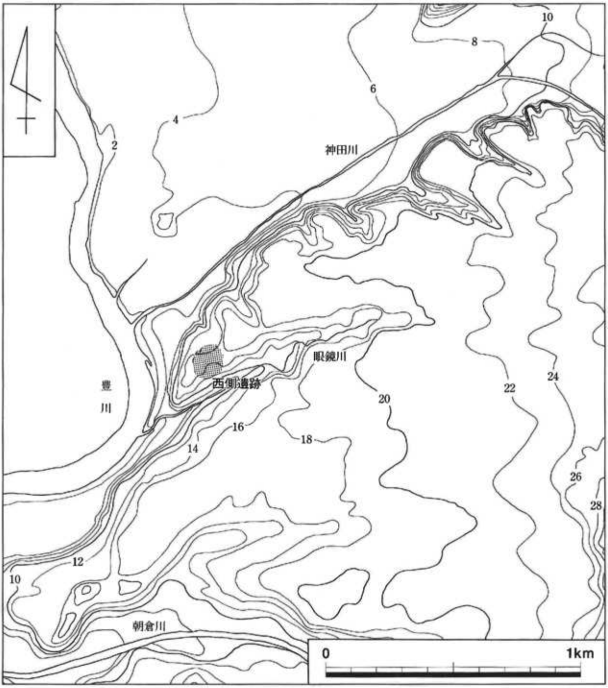
より詳細に見ると、西側遺跡は南側が南西から北東にむけ大きく開析した谷に、西～北側が豊川の沖積地に、東側が北から南に向け入り込んだ谷によって区画された段丘の上面にある。この付近では豊川の沖積地を望む北側を最高所に、南に向け緩やかに下る傾斜になっており、ここに弥生時代～近世までの数多くの遺跡が分布する。集落の中心地域は遺構や遺物の出土状況から南側の段丘崖に面し

第１図　遺跡位置図（１／25,000）

たところと推定され、ここでは豊富な湧水を得ることができる。また付近は日当たりが良いため、以前は付近住民らから「日南坂（ぼとうざか）」と呼称されていた。冬期には付近の住民がここまで出向いて暖をとったといわれている。

参考文献

水野季彦　1991「遺跡の立地」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第12集　牛川西部地区遺跡範囲確認調査報告』



第２図　遺跡周辺地形図（１／15,000）

2．歴史的環境（第3図）

西側遺跡が所在する牛川地区は、豊橋市内有数の遺跡集中地帯のひとつである。豊川を望む河岸段丘上に、南西から北東にかけて延々と遺跡が続いており、特に段丘の地下を流れる伏流水の湧出地に恵まれ、日照条件が良く、また前面に豊川の豊かな沖積地を望む段丘端付近に集中する傾向にある。さらに、西側遺跡周辺は豊川や背後の弓張山系といった特徴的な地形に囲まれ、多様な遺跡が存在している。弓張山系には群集墳をはじめ山岳信仰関連遺跡が存在し、豊川は東三河地域における経済の大動脈として古来より機能してきた背景を持つ。

縄文時代　豊橋市北部に所在する嵩山蛇穴遺跡は、縄文時代草創期から利用された山間の岩陰遺跡である。調査によって表裏押圧縄文土器をはじめ早期の押型文土器などが出土している。石塚貝塚はかつて三河湾であった段丘端の斜面に形成された前期中葉の貝塚で、ハイガイを主体としている。西側遺跡の至近では、段丘上の集落と推定される眼鏡下池北遺跡（3）で早期の煙道付炉穴が約40基検出され、洗島遺跡（25）では、中期中葉を主体とする土器が出土している。早期の土器はおいほて遺跡（22）や浪ノ上遺跡（6）からも出土している。西側遺跡とは豊川を挟んだ西方の沖積低地に位置する大蚊里貝塚・五貫森貝塚は、自然堤防上に立地するヤマトシジミを主体とする晩期の貝塚で、東海地方における晩期土器編年の標識遺跡である。このほか西側北遺跡、熊野遺跡（4）など、西側遺跡周辺の段丘上でも晩期の条痕文土器が出土している。

弥生時代　沖積地を望む段丘端部に所在する白石遺跡（11）は、遠賀川系土器が出土したことで知られ、断面U字形の環濠と推定される溝が検出されている。豊川によって形成された沖積低地の自然堤防上に立地する瓜郷遺跡は中期の拠点集落であり、土器のほか豊富な木製品、玉類、骨角器などが出土した。なお、西側遺跡周辺の段丘上では熊野遺跡、浪ノ上遺跡（6）、狭間遺跡（8）で竪穴住居や方形周溝墓が確認されている。後期の拠点集落である高井遺跡（12）は当時の豊川左岸域における中心的な集落と推定され、環濠から寄道～欠山式期の土器が大量に出土した。高井遺跡では中期の大型方形周溝墓が検出されており、遅くとも中期後葉には集落を形成し、後期に最も盛期を迎えたものと考えられる。段丘の下に所在する庄司ヶ下遺跡（10）や西砂原遺跡（13）も含めると、集落の範囲はかなりの広域に及ぶだろう。このほか、西側遺跡の同一段丘面上にある浪ノ上遺跡や中野遺跡、狭間遺跡、さらに高井遺跡の北側に所在する城ノ内遺跡も後期を主体とする集落跡であり、恐らく高井遺跡の周辺に存在する小規模な衛星集落だろう。

古墳時代　古墳時代の集落跡は西側遺跡及びその周辺で検出されているが､いずれも小規模である。竪穴住居は白石遺跡、高井遺跡、熊野遺跡、東田遺跡（23）などで確認されているが、集落自体の様相が明らかな例は少ない。

一方西側遺跡の周辺は古墳が多いところでもある。豊橋市北部では、丘陵上に前期の前方後方墳、前方後円墳が並ぶようにして築かれている。西側遺跡の近くでは明らかに前期までさかのぼる古墳は無いが、全長38ｍの前方後円墳・東田古墳（24）からは有黒斑の埴輪片や鉄刀、鳥文鏡が出土しており、中期前葉の首長墳に位置づけられている。

西側遺跡の近辺には、浪ノ上1号墳、稲荷山古墳、森岡古墳群（9）、中野遺跡（7）中に所在し

たとされる中野古墳など小規模な方墳が点在する。浪ノ上1号墳では木棺直葬の主体部から素環頭大刀が出土し、森岡古墳群中の1号墳では周溝の底面から少し浮いたかたちで6世紀前葉の土器が多量に出土した。また、中野古墳からは霞ヶ浦沿岸に分布が集中する常総型石枕が出土しており、その分布の西限にあたる。こうした方墳はさらに北側の段丘上にも群をなして存在し、とくに高井古墳群(15)は20基を超える古墳数があり、中には一辺20mを超える比較的大型の方墳も存在する。

これらの方墳は葺石を持たず、主体部は木棺直葬もしくは簡易な石囲いなど、石室を持たない点といった共通の特徴を持っている。以上のように、段丘上の方墳群は東三河地域ではきわめて特異な古墳群で、帰属時期はおおむね5世紀と想定されることから、いわゆる初期群集墳の範疇に含めても良いだろう。

さらに、後期の群集墳は三河・遠江の国境である弓張山系に多数分布している。古墳が特に集中するのは豊橋市北部の石巻地区だが、西側遺跡に近いところでも乗小路A～D古墳群、キジ山古墳群など比較的規模の大きな古墳群が存在する。後期群集墳はいずれも横穴式石室を持ち、丘陵の山麓、山腹、山頂などに分布するといった特徴がある。

奈良時代　西側遺跡では奈良時代の遺物が出土しており、何らかの遺構が存在すると思われるが、詳細は不明である。西側遺跡の南西、現在の豊橋公園がある周辺は古代の遺構・遺物が集中して発見されており、飽海遺跡と名付けられている。中でも緑釉陶器が比較的広域にわたって散布しており、何らかの公的施設が存在する可能性が高い。近年は飽海郡衙の所在地にも比定されている。また西先原遺跡では道路状遺構や柵列が検出されている。

平安時代　灰釉陶器は西側遺跡を含む多くの遺跡で確認されている。また弓張山系にはいくつかの山岳寺院址が確認されはじめ、平安時代後～末期に山岳信仰の教線が東三河まで一気に及んだと推定されるようになった。このほか、豊橋市域では海浜部を中心に伊勢神宮領である神戸や御薗が設置され、西側遺跡の近くには飽海神戸や吉田御薗、蘆御薗などが置かれている。

中世　中世前期の遺物は広範囲に出土しており、積極的な開発と集落の拡大がこの時期に行われたと推定される。西側遺跡でも山茶碗が多数出土しているが、文献資料が少ないためその性質を探ることは難しい。

一方、中世後期には西側遺跡周辺でも活発な活動があり、城が次々と築かれていった。吉田城址は東三河の中心部に位置し、街道と河川の交差する要衝として数々の武将による争奪戦が繰り返されたところである。二連木城址(26)は、東三河平野部への進出をもくろんだ渥美半島の戸田氏が、その足がかりとして吉田城の築城より前に築いた城である。このほか、下条館址(28)、浪ノ上古屋敷址など中・小規模な土豪による城が各所に築かれている。吉田城址と二連木城址では曲輪や堀、土塁などが残り、下条館も最近まで自然堤防上に土塁などが残されていた。

このほか、熊野遺跡では「地下式坑」と呼ばれる特殊遺構が検出されている。

近世　吉田城は近世に、譜代大名の居城として幕末まで存続した。石垣は本丸の周囲と主要な門にしか築かれていないが、全体の規模は壮大だったといわれ、城の周囲は城下町であると同時に東海道五十三次の宿場町として栄えた。また牛川焼窯址は近世に開窯された陶器窯で、陶器や窯道具などが現在も散布している。

1　西側遺跡	2　西側古墓群	3　眼鏡下池北遺跡	4　熊野遺跡	5　稲荷山古墳群
6　浪ノ上遺跡	7　中野遺跡	8　狭間遺跡	9　森岡古墳群	10　庄司ヶ下遺跡
11　白石遺跡	12　高井遺跡	13　西砂原遺跡	14　大清水遺跡	15　高井古墳群
16　玉川変電所遺跡	17　白山Ⅰ・Ⅱ遺跡	18　青木Ⅱ遺跡	19　西屋敷Ⅰ遺跡	20　多り畑遺跡
21　神ヶ谷遺跡	22　おいぼて遺跡	23　東田遺跡	24　東田古墳	25　洗島遺跡
26　二連木城址	27　高井城址	28　下条城址	29　乗小路A～D古墳群	30　キジ山古墳群

第３図　周辺遺跡分布図（１／25,000）

第２章　調査の目的と経過

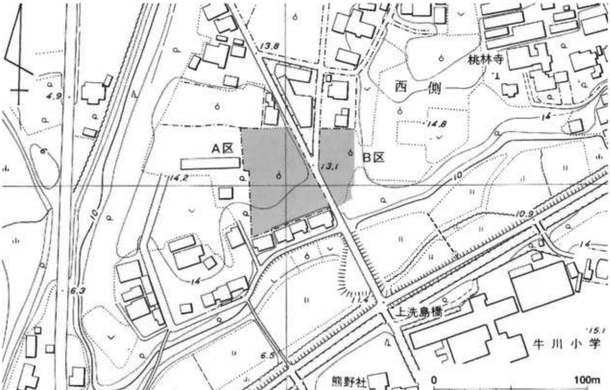
１．調査にいたる経過（第４図）

青陵街道と豊川・神田川に挟まれた場所に位置する牛川町の大部分では、平成７年度から豊橋牛川西部土地区画整理組合によって約43haに及ぶ土地区画整理事業が計画・実施されている。これに先立って昭和61年度と平成元年度に分布調査を行って遺跡範囲を推定し、さらに平成２年度と９年度には範囲確認のための試掘調査を実施している。以上の調査により事業の対象地には、西側遺跡・洗島遺跡・眼鏡下池北遺跡・東側遺跡など８遺跡と小規模な古墳を確認することができた。

今回の西側遺跡の発掘調査は、この土地区画整理事業に伴うものである。調査対象地は、現状はすべて畑地（果樹園）で、ほぼ平坦な地形である。中央には南北に道路が貫通し、道路を挟んで東西にまたがっている。ここは道路造成や切土工事が行われるところである。

調査区の設定は、国土交通省告示による座標に準拠して基準点測量を行い、西側遺跡の北西隅を起点に西から東にＡ～Ｚ、AA、AB、AC、AD……、北から南に１～17、18……としてその交点を地区名としたもので、今回の調査区はＭ－14区～Ｔ－19区がその対象範囲となる。

排土置き場の確保のため、調査は南側の前半と北側の後半とに２分割して行った。調査はいずれも重機による表土掘削後に人力による遺構検出・掘削を行い、出土状況図や土層図の作成、写真撮影などを随時行っていった。そして前半と後半の各調査終了後に、航空写真撮影及び図化作業を行っている。



第４図　調査区位置図（１／2,500）

第５図　調査区全体図（1／500）

2．調査の方法と経過（第5～11図）

以上の経緯をもとに、調査に着手した。調査期間は平成14年7月1日～10月31日の4ヶ月間である。今回の調査区は、道路を挟んで東西に地区が分けられる。そこで、西側をA区、東側をB区と大別し、両地区を並行させながら調査を行った。調査を進める中で、A区の南半（ほぼ前半調査の範囲）が果樹園の苗木植樹による溝状のカクランを受けていることが判明した。カクランは南北に延びるかたちで10カ所存在したが、北半では幸いなことに遺構面まで達していなかった。

■前半の調査

7月1日　発掘道具を搬入する。

7月2日～5日　重機を使用して表土除去作業を行う。

7月8日　遺構検出・掘削作業開始。後半の調査地が排土置き場となるので、A区は南東端、B区は南端から、それぞれ北に向かって順次作業を進める。掘削はおもに人力で行い、排土の搬送には不整地走行車を使用した。

8月21日　B区で検出された弥生時代後期前葉の溝（SD－1）から多量の土器が出土したため、業者に依頼し写真測量による出土状況図の作成を行う。これら土器は後に人力で取り上げ、2回目の出土状況図を現場作業員の手実測により作成した。

9月4日　遺構の掘削がほぼ完了し、航空写真撮影を行う。

9月8日　第1回目の現地説明会。午前と午後に実施し、参加者は計200名。

■後半の調査

9月14日～24日　重機を使用して表土除去作業を行う。

9月19日　A区の遺構検出・掘削作業を開始する。前半の調査地が排土置き場となるので、北端から南に向かって作業を進める。

9月20日　古墳時代の竪穴住居が検出され始める。

9月26日　遺構検出作業中に銅鐸の飾耳が出土した。遺構検出の完了後、周囲の土ごと石膏で固め、取り上げを行った。

10月1日　大型の台風が来襲し、調査区が水没した。

10月4日　牛川小学校探検クラブ生徒（4～6年生）が体験発掘。

10月16日　弥生時代後期前葉の溝（SD－1）の続きの遺物出土状況図を業者に依頼し作成する。

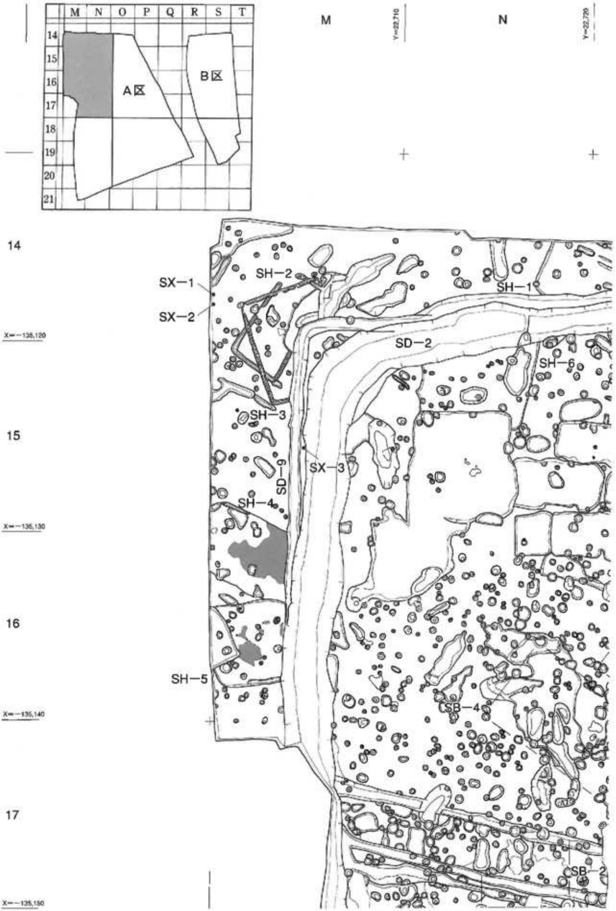
10月16日　難波洋三氏（京都国立博物館）来訪、銅鐸飾耳について教示を受ける。

10月17日　牛川小学校2年生生徒が体験発掘と土器洗浄体験。

10月27日　第2回目の現地説明会。午前と午後に実施し、参加者は計300名。遺跡の説明、出土品展示のほか、土器接合体験やクイズラリーなどを行う。

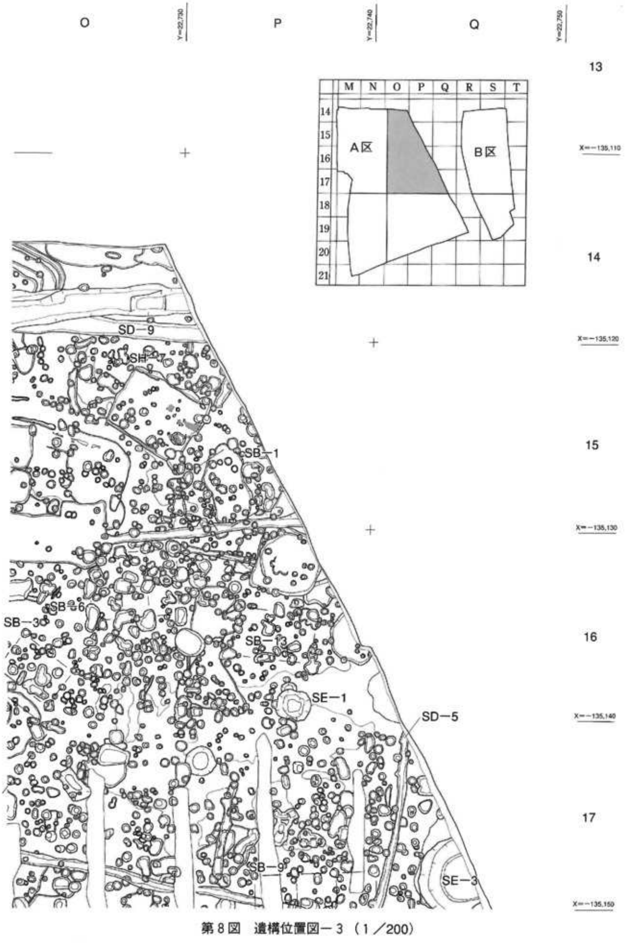
10月30日　遺構の掘削が完了し、航空写真撮影を行なう。

10月31日　発掘道具を撤収し、現地での作業を完了する。



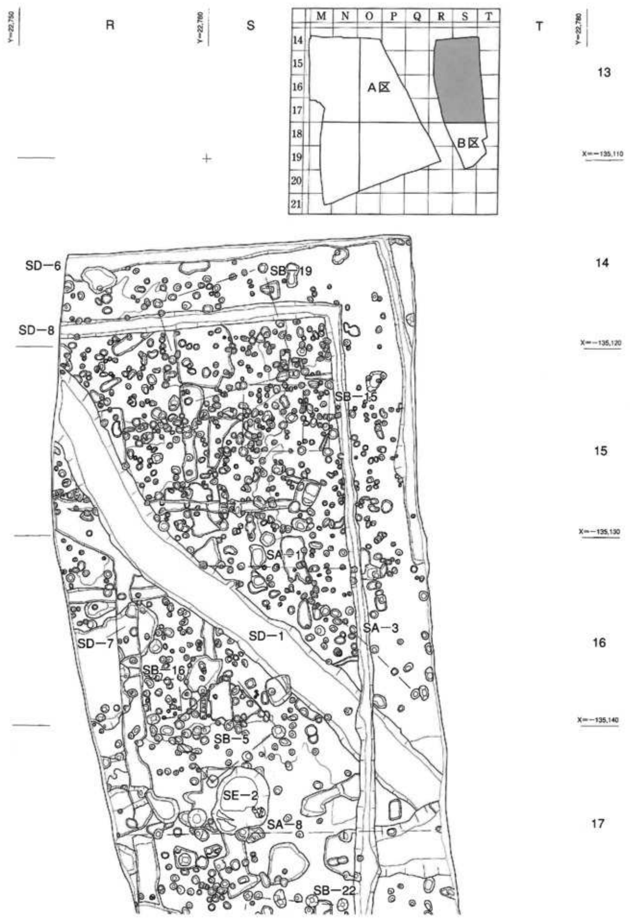
第６図　遺構位置図−１（１／200）

第７図　遺構位置図−２（１／200）

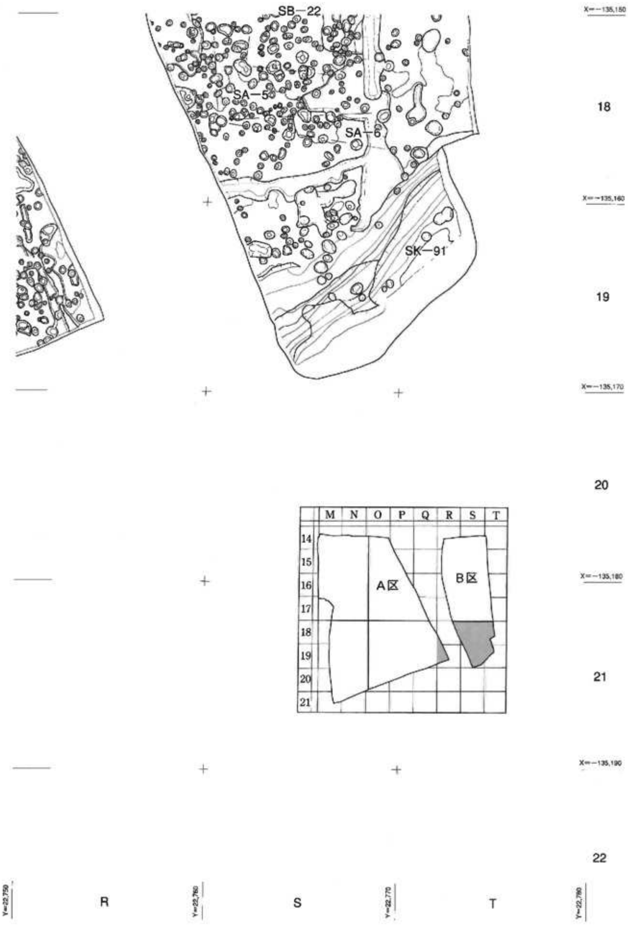


第８図　遺構位置図−３（1／200）

第9図　遺構位置図－4（1／200）



第10図　遺構位置図−５（１／200）



第11図　遺構位置図−６（１／200）

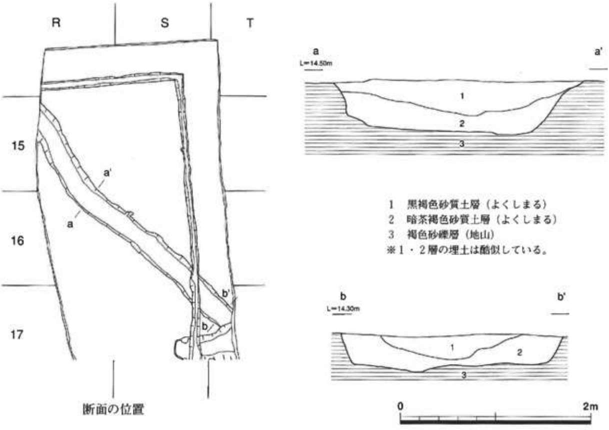
第3章 遺 構

1．環濠（ＳＤ－１）（第10・12～23図）

環濠は東側調査区のＲ－15区からＴ－17区にかけて、ほぼ直線的に検出された。検出された環濠の長さは約30ｍ、幅は約2.5ｍ、深さは約0.6ｍで、断面は箱形である。環濠は、台地の中央部から縁辺部に向かって伸びており、左右どちらが集落の内部になるかははっきりしない。このような地形上の位置関係は、石巻本町の高井遺跡で確認された環濠と同じである（註１）。しかし、西側遺跡の環濠は、断面が箱形になっており、高井遺跡の断面Ｖ字状の環濠とは異なっている。

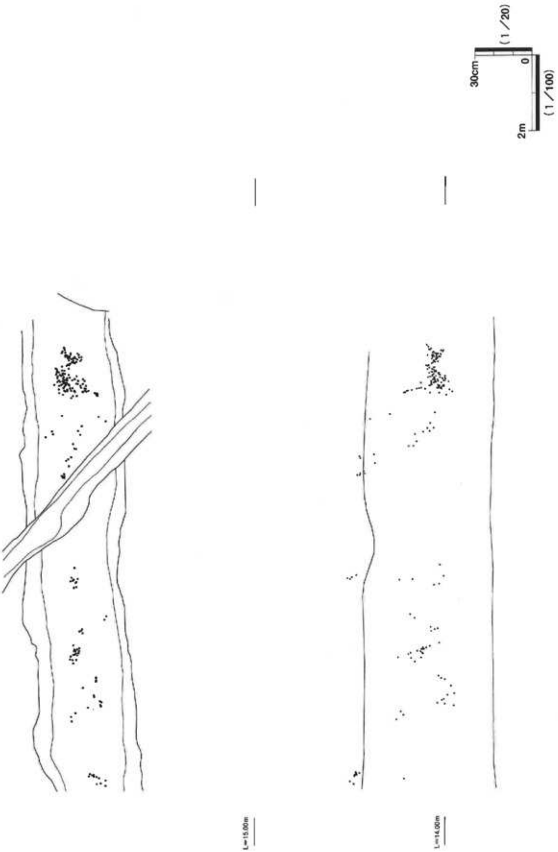
環濠の堆積土は、２層（第12図）に分類可能であるが、その違いは明瞭ではなく、断面の中央部が最も低くなるようなＵ字状に堆積しており､土塁の位置を推定できるような偏った堆積はしていない。このような堆積状況も、高井遺跡と同様である。

遺物の出土状況は、検出された環濠のほぼ中央部で、かつ北半部分に集中しており、南半は部分的にまとまりながら散漫に出土している。堆積していた埋土は２層に分離可能であるが、明瞭ではない。出土した遺物には明らかに高低差があり、２層に分類できる（第13・14図）。上層は古墳時代中期の遺物が集中しており（第17・18図）、この時期まで環濠が埋まりきらず、溝状に残っていたことを示している。下層は弥生時代後期前半の土器が集中して出土している（第16・17図）。下層は、約20㎝

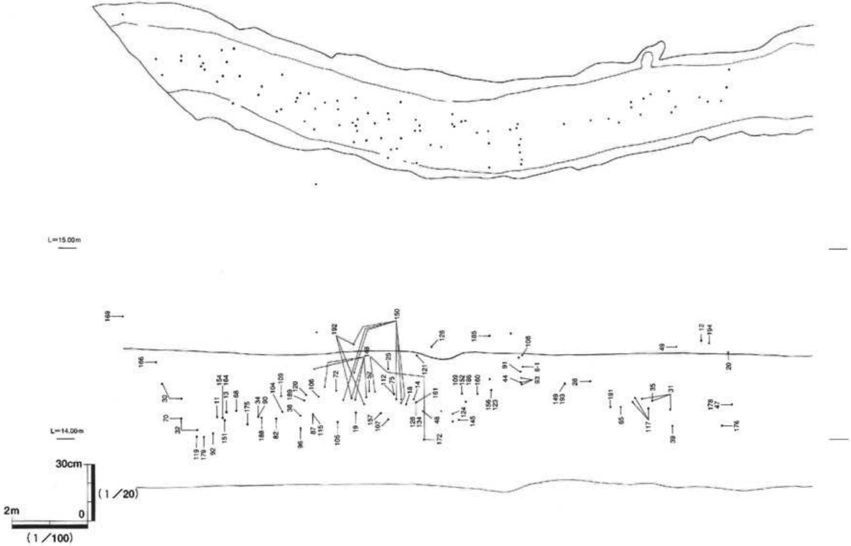


第12図　ＳＤ－１断面図（１／40）

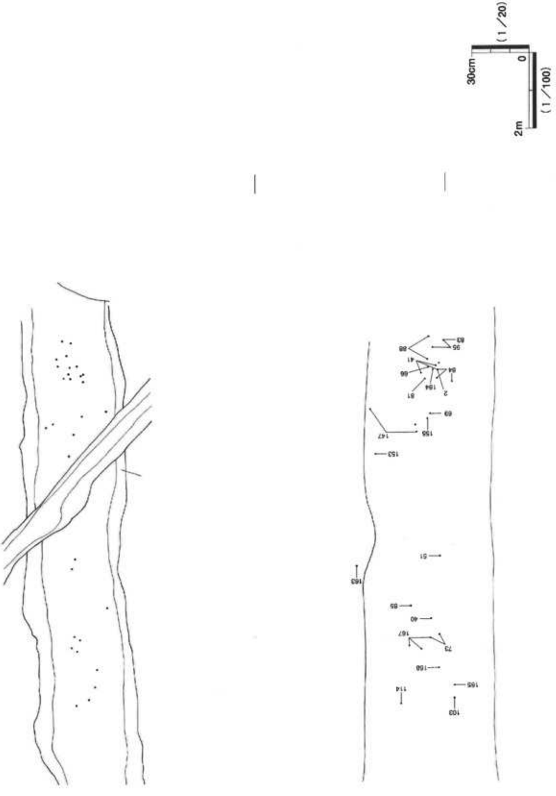
第13図 SD−1遺物出土状況図−1（1／20・1／100）



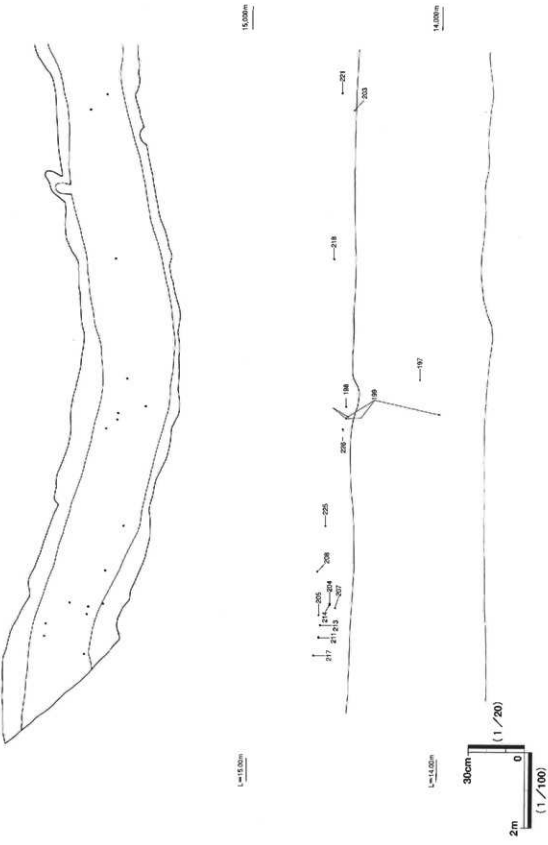
第14図 ＳＤ－１遺物出土状況図－２（１／20・１／100）



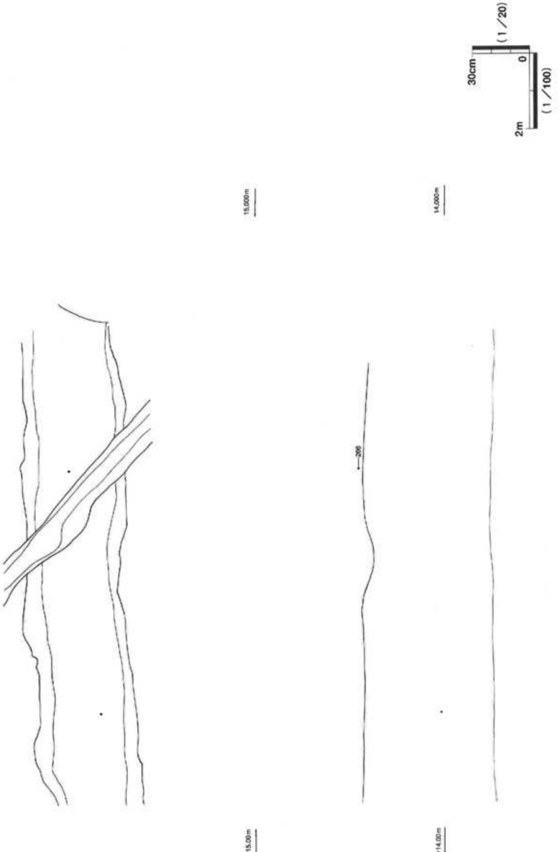
第15図　SD－1弥生土器出土状況図－1（1／20・1／100）



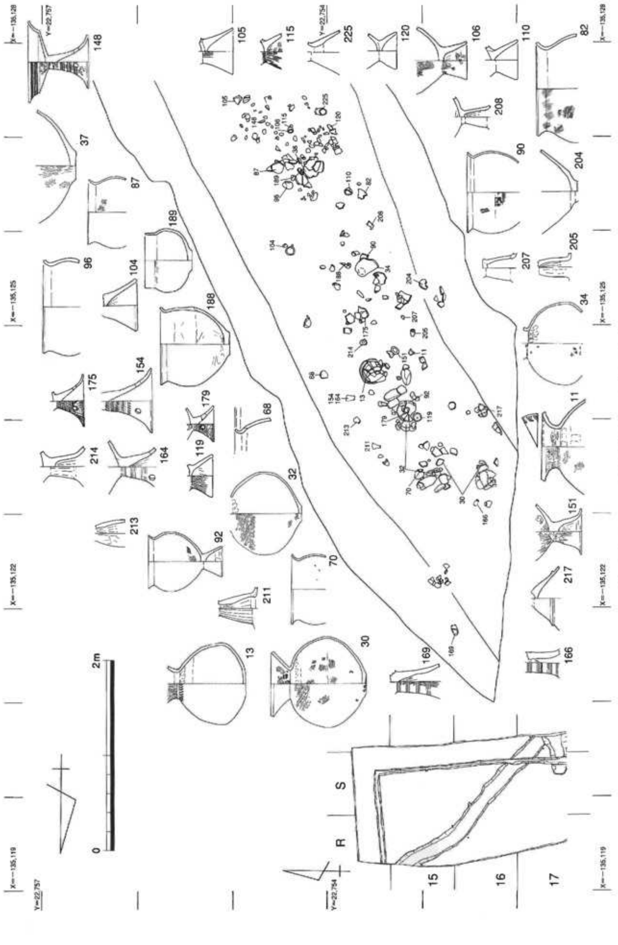
第16図 ＳＤ－１弥生土器出土状況図－２（1／20・1／100）



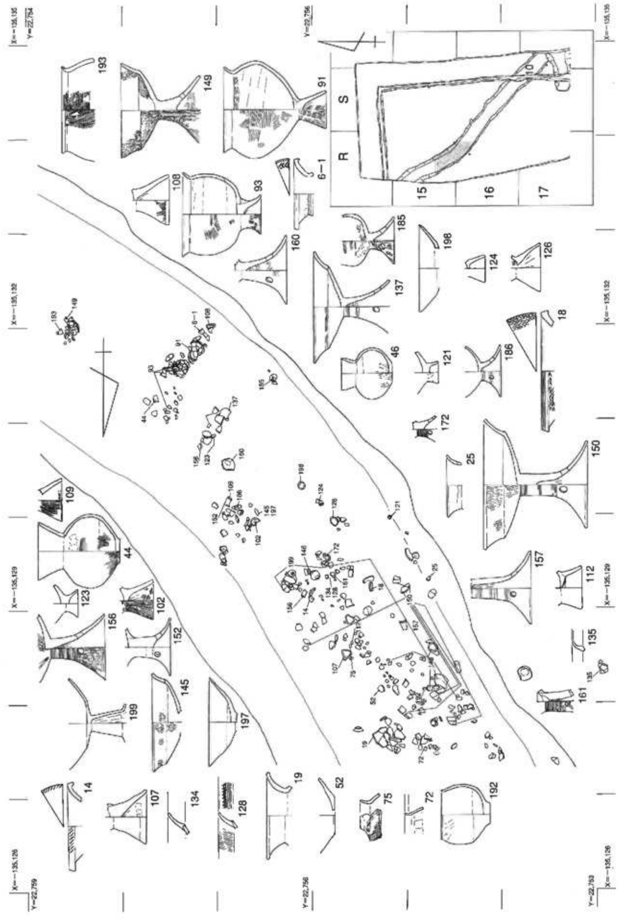
第17図　ＳＤ－１古墳時代遺物出土状況図－１（１／20・１／100）



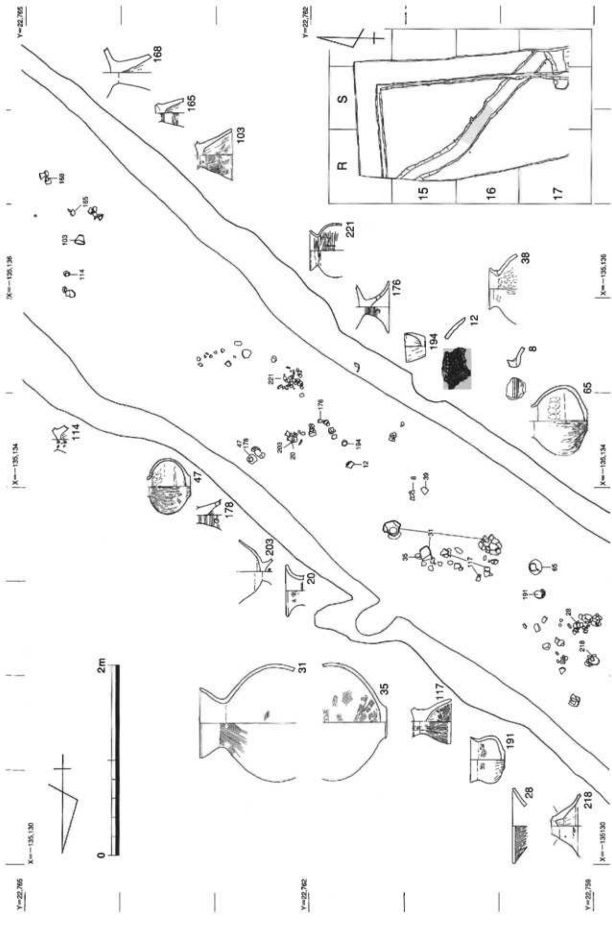
第18図　ＳＤ－１古墳時代遺物出土状況図－２（１／20・１／100）



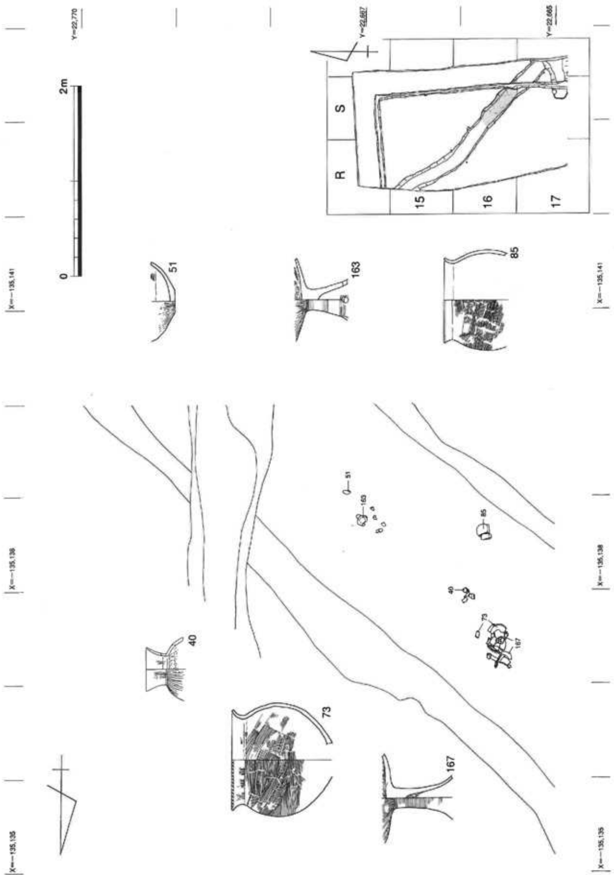
第19図 SD−1出土状況図−1（1/40）



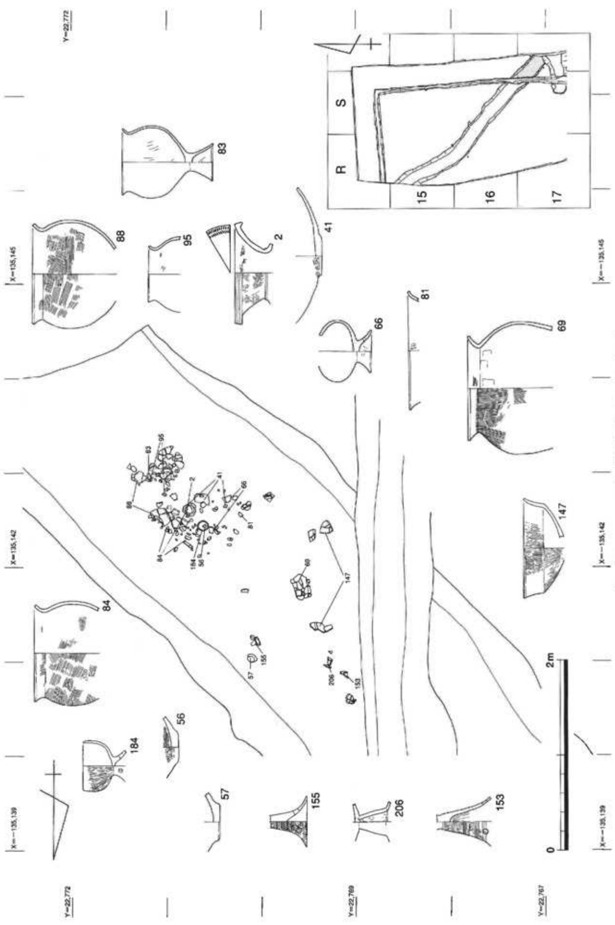
第20図 ＳＤ−１出土状況図−２（１／40）



第21図　SD－1出土状況図－3（1／40）



第22図　ＳＤ－１出土状況図－４（１／40）



第23図　ＳＤ－１出土状況図－５（１／40）

の無遺物層が堆積した後に、遺物が堆積しており、その厚さは約40cmで、ほぼ水平に堆積している。出土した土器は破片が多く、全形を復元できるものは少数である。

出土状況からは、意図的に据え置かれたような土器は見られず、廃棄されたものが順次堆積していったように見える。このような状況は、高井遺跡と同様であるが、高井遺跡では、下層に完形に近い土器が廃棄されており、その他の土器も残存率が高い。西側遺跡では破片資料が多く、高井遺跡よりも廃棄物としての性格が顕著であると思われる。

環濠は、出土土器からは、弥生時代後期前葉（寄道様式・畿内第Ⅴ様式並行期）に掘削され、間を置いて古墳時代中期に最終的に埋まったものと考えられる。

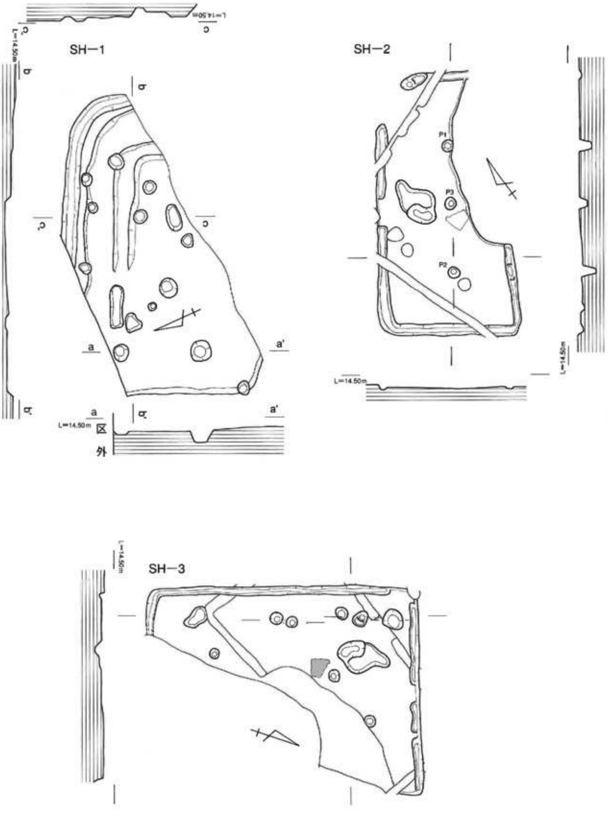
2．竪穴住居（第24～28図）

今回の調査では、７棟の竪穴住居を検出した。時期は弥生時代後期前葉の寄道式期、及び古墳時代中期前葉と後期である。いずれもＡ区の北辺に集中して検出されている。建物が重複する事例は建て替えが想定されるほか、貼床が比熱した火災住居も認められる。また、ＳＨ－６では円筒埴輪片が出土しており、注意される。

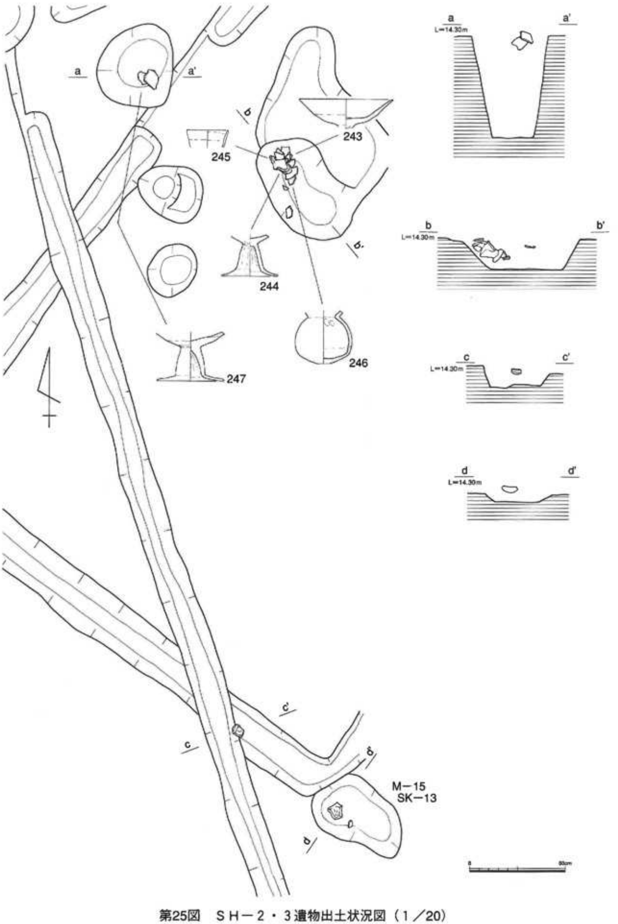
ＳＨ－１（第24図）　Ｎ・Ｏ－14区で検出された。調査区端と溝ＳＤ－２に南北を挟まれているが、6.4×4.3ｍの隅丸長方形を呈している。著しく削平されており、10cm前後の掘り込みしか認められないが、北側には壁溝が遺存している。主柱穴は判然とせず、炉も確認できない。また、床面の東寄りには２段を成して落ち込んでおり、これが住居内の何らかの施設、あるいは重複住居であるかどうかは分からない。出土遺物のうち図化に耐えるものはないが、弥生土器の小片が出土しており、遺構の時期は弥生時代後期前葉（寄道式期）と考えられる。

ＳＨ－２（第24・25図）　Ｍ－14・15区で検出され、ＳＨ－３と重複している。5.6ｍ×2.9ｍの長方形を呈している。著しく削平され掘り込みは10cm程度しか認められないが、壁溝によって平面形を把握することが可能である。壁溝は北側隅など一部途切れる所もあるが、これは削平による。主柱穴は通例のような４本柱ではなく、中央に並ぶ２本、もしくはその中間を含めた３本柱と考えられ、柱穴の規模はＰ１が径25cm、深さ30cm、Ｐ２が径25cm、深さ30cm、その中間にあるＰ３は径25cm深さ20cmを測る。また、床面の中央のやや南西寄りに地床炉が存在する。　出土遺物はＳＨ－３と区別することができなかった。住居内およびその周辺から出土する遺物はおおむね古墳時代中期の土師器（第62図243～246）で占められており、切り合い関係からＳＨ－２が先行して建てられ、後にＳＨ－３に建て替えられたものと考える。

ＳＨ－３（第24・25図）　Ｍ－14・15区で検出され、ＳＨ－２と重複している。5.75ｍ×4.5ｍの長方形を呈しており、南東側は溝ＳＤ－２によって破壊されている。著しく削平され掘り込みは10～15cm程度しか認められない。壁沿いには壁溝が存在し、削平により一部途切れる所がある。住居内にはいくつかの土壙が存在するが、主柱穴は判然としない。炉は確認されておらず、恐らく破壊された部分に存在するのだろう。出土遺物には土師器の高坏や壺（第62図247～249）などがある。切り合い関



第24図 竪穴住居−1（1／80）



第25図　ＳＨ－２・３遺物出土状況図（１／20）

係からＳＨ－３が後に建て替えられたものと考える。古墳時代中期の遺構だろう。

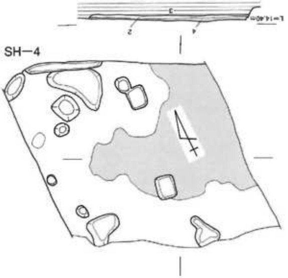
ＳＨ－４（第26図） Ｍ－15・16区で検出され、西端は調査区外、東側は溝ＳＤ－２に切られ、南側はＳＨ－５に接している。現状で南北3.9ｍ以上、東西5.8ｍ以上の（隅丸）長方形を呈している。著しく削平され掘り込みは10cm程度しか認められず、壁溝の有無も明らかではない。床面は西側一帯に硬化面が認められ、さらにこれが比熱し広範に赤化していた。したがってこれは粘土を使用した貼床であり、埋土に多量の炭が含まれることから焼失住居であろう。主柱穴は判然とせず、地床炉も明らかではない。出土遺物が認められないため帰属時期は不明だが、ＳＨ－５との位置関係からさほど時期差を置かないものと思われる。

ＳＨ－５（第26図） Ｍ－14区で検出され、西側はＳＨ－８と重複している。東側は溝ＳＤ－２に切られている。南北4.5ｍ×東西4.25ｍ以上の（隅丸）長方形を呈している。著しく削平され掘り込みは10cm程度しか認められず、壁溝の有無も明らかではない。床面は粘土による貼床によって硬化しており、中央部を中心に数カ所が比熱して赤化している。主柱穴は判然としない。出土遺物には弥生土器の高坏（第62図250・251）があり、遺構の時期は弥生時代後期前葉（寄道式期）以降と考えられる。

ＳＨ－６（第27図） Ｎ－15区で検出され、北側は溝ＳＤ－２に、南側はＳＫ－20に切られている。規模は東西5.8ｍ、南北5.2ｍ以上で、わずかに残る南東側コーナーから平面形は方形もしくは長方形であろう。著しく削平され掘り込みは10cm程度しか認められず、壁溝は存在しない。主柱穴はわかりにくく、南辺に近い２カ所がこれに該当すると考える。Ｐ１は径35cm、深さ25cm、Ｐ２は径35～45cm、深さ25cmを測る。床面の中央南寄りに焼土が存在しており、これが地床炉となる可能性はあるが、時期不明の土壙と重複すること、そして帰属時期からすれば溝ＳＤ－２によって壊された北側にカマドが存在した可能性がある。また、床面西寄りに平面長楕円形の土壙が存在する。住居の埋土からの掘り込みは確認されなかったので、ＳＨ－６に伴う遺構と考えられ、南北2.6ｍ、東西1.2ｍ、床面からの深さ15cmである。内部からから遺物がまとまって出土した（土器集中）。出土遺物はほとんどがこの土壙から出土したもので、土師器の甕、把手付鍋、円筒埴輪片（第62図255～257）があるほか、図化していないが鉄器片もある。遺構の時期は後期前葉と考えられる。

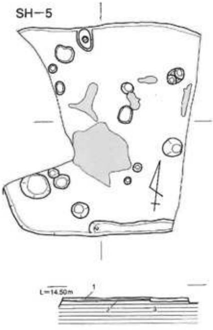
ＳＨ－７（第26・28図） Ｏ・Ｐ－15区で検出され、4.65ｍ×3.7ｍの長方形を呈している。著しく削平されるが掘り込みは15cm～20cm程度は認められ、今回検出された中では残存状態は良好である。壁溝は南北辺にそれぞれ途切れながらも確認されたが、東西辺では検出できなかった。主柱穴は判然としない。床面の東寄りに焼土が集中する部分があり、焼土の一部は壁面まで及んでいた。破壊されたカマドの痕跡と考えられるが、住居の中央に近いところで検出された焼土は他とは離れており、地床炉の可能性がある。住居の帰属時期は東三河地域にカマドが導入された時期に相当し、この時期にはカマドと地床炉の共伴例（豊川市駒場遺跡）も認められることから、本例がそれに該当してもおかしくはない。出土遺物は土師器の台付甕、高坏（第62図252～254）があり、遺構の時期は古墳時代中期であろう。

SH−4

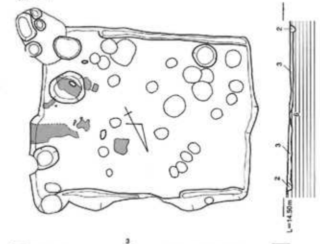


SH−4・5
1 黒褐色砂質土層
2 暗茶褐色砂質土層
（地山ブロックを多く含む）
3 茶褐色砂質土層（地山）
4 赤色焼土層（貼り床が被熱し赤化）

SH−5

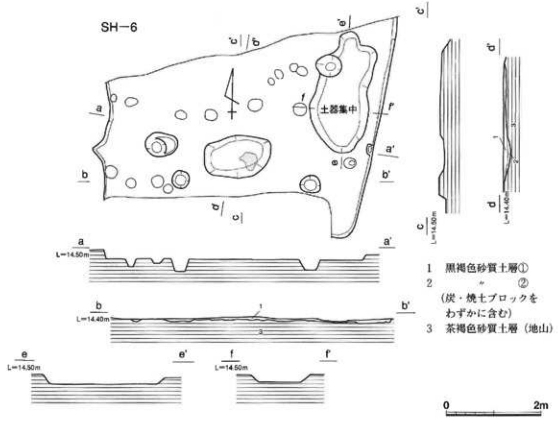


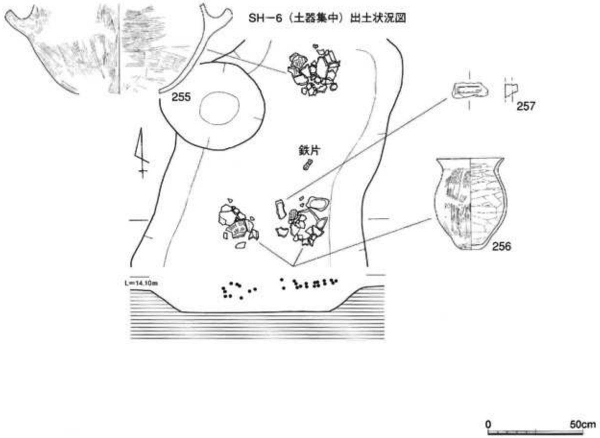
SH−7



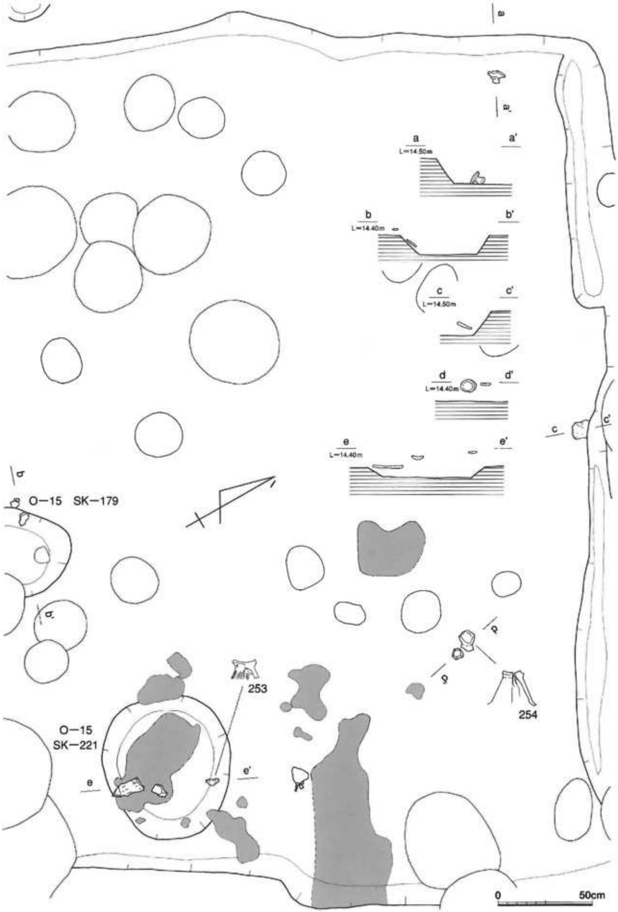
SH−7
1 暗茶褐色砂質土層（別土壙の埋土）
2 黒灰色砂質土層①（壁溝埋土）
3 〃 ②（地山ブロックを含む）
4 焼土
5 暗茶褐色砂質土層
6 茶褐色砂質土層（地山）

第26図 竪穴住居−2（1／80）





第27図 竪穴住居－3（1／80）



第28図　ＳＨ－７遺物出土状況図（１／20）

3．掘立柱建物（第29～38図）

今回の調査では、22棟の掘立柱建物を認定した。柱穴自体ははるかに多く検出されているので、実際にはこれ以上の建物があることは間違い無いのだが、あまりに分布が複雑なため充分把握できたとは言い難い。古代にさかのぼる建物も若干認められるが、大半は中世～近世の建物である。

ＳＢ－１（第29図）　Ｐ－15区で検出された２間×１間の建物である。主軸方位はＮ－33°－Ｗである。規模は3.6ｍ×2.9ｍを測る。柱穴は平面が楕円形を呈するものが多く、径30～80㎝、深さは20～50㎝とばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から弥生土器、土師器、須恵器片が出土しており、建物の時期は古墳～奈良時代と考えられる。ただし、不整形で等間隔に並ばない柱穴の形態から、中世以降となる可能性もある。

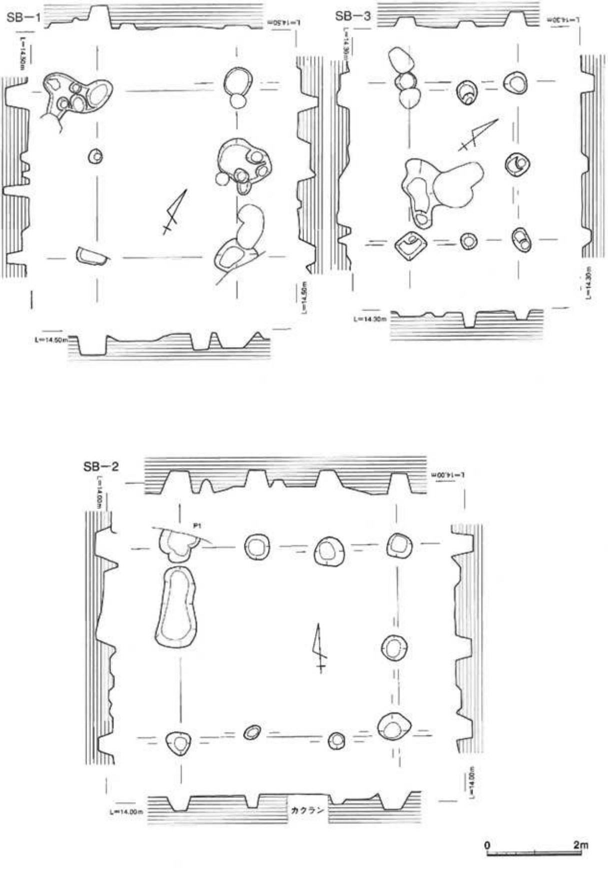
ＳＢ－２（第29図）　Ｎ－17区で検出された３間×２間の建物である。主軸方位はＮ－°０－Ｗである。規模は4.6ｍ×4.0ｍを測る。柱穴は平面が円形または楕円形を呈し、径50～65㎝、深さは40～50㎝であるが、南辺の２カ所は他に比べ貧弱である。出土遺物にはＰ１で出土した須恵器の坏（第62図258）があるほか、弥生土器、土師器、須恵器片が出土しており、建物の時期は古墳～奈良時代と考えられる。

ＳＢ－３（第29図）　Ｏ－16区で検出された２間×２間の建物で、ＳＢ－４と平列して存在しており、両者は同時存在したと考えられる。主軸方位はＮ－40°－Ｅである。規模は3.35ｍ×2.25ｍを測り、桁行と梁間で柱間が異なる。柱穴は平面が楕円形を呈するものが多く、径40～50㎝、深さは20～30㎝である。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から弥生土器、土師器片にまじり山茶碗片が出土しており、後述するＳＢ－４と同時期であることから、建物の時期は中世と考えられる。

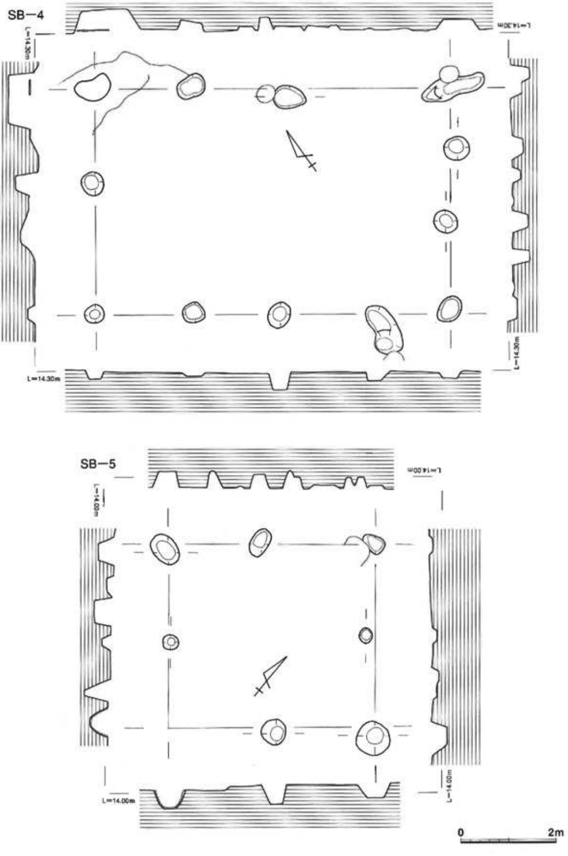
ＳＢ－４（第30図）　Ｎ・Ｏ－16・17区で検出された４間×３間の建物である。主軸方位はＮ－36°－Ｅである。規模は7.5ｍ×4.8ｍを測る。柱穴は平面が円形・楕円形を呈するものが多く、径40～70㎝、深さは10～40㎝とばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から土師器、須恵器、山茶碗片のほか、ごくわずかではあるが陶器片も出土しており、建物の時期は中世前期～後期と考える。

ＳＢ－５（第30図）　Ｒ・Ｓ－16・17区で検出された２間×２間の建物である。主軸方位はＮ－41°－Ｗである。規模は4.4ｍ×3.9ｍを測る。柱穴は平面が円形・楕円形を呈し、径30～70㎝、深さは10～40㎝とばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、Ｐ１から灰釉陶器片が出土している。しかし同時期の遺構は今回の調査ではほとんど確認されていないため、建物の時期は中世前期以降と考えられる。

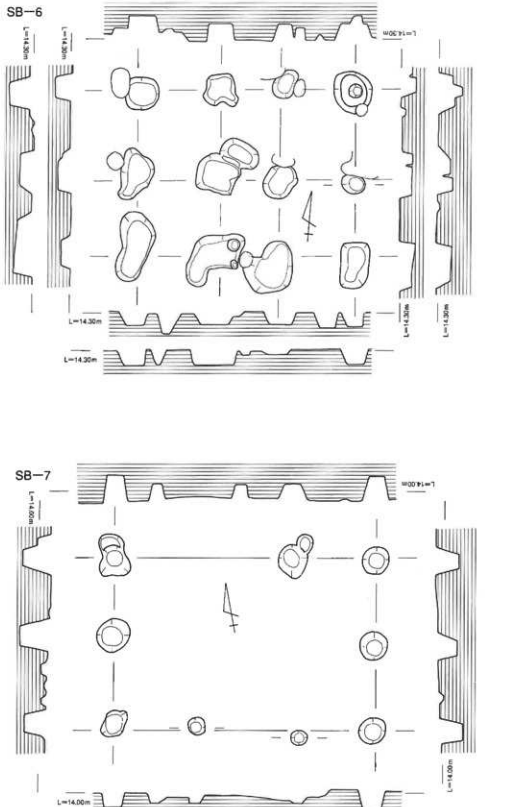
ＳＢ－６（第31図）　Ｏ・Ｐ－16区で検出された３間×２間の総柱建物である。主軸方位はＮ－５°－Ｗである。規模は4.6ｍ×3.6ｍを測る。柱穴は平面形が楕円形、または不整形なものが多く、径40～100㎝、深さは30～50㎝とばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から弥生土器、須恵器片のほか、土師器の皿、くの字状口縁鍋などが出土しており、建物の時期は中世後期（戦国時代）と考えられる。



第29図 掘立柱建物−1（1／80）



第30図　掘立柱建物－2（1／80）



第31図　掘立柱建物－3（1／80）

ＳＢ－７（第31図）　Ｍ・Ｎ－18区で検出された３間×２間の建物である。主軸方位はＮ－６°－Ｅである。規模は5.6ｍ×3.65を測る。柱穴は平面が円形・楕円形を呈し、径30～70㎝、深さは35～65㎝とばらつきがあり、北辺では１ヵ所が未検出であるほか、南辺は中間の柱穴が小振りである。出土遺物に図化できるものは無いが、Ｐ１から須恵器の坏のほか陶器の碗、土師器の皿片が出土しており、建物の時期は中世後期（戦国時代）と考えられる。

ＳＢ－８（第32図）　Ｏ－18区で検出された２間×１間の建物である。主軸方位はＮ－30°－Ｗである。規模は5.2ｍ×2.55ｍを測る。柱穴は平面が楕円形を呈するものが多く、径45～90㎝、深さは20～45㎝とばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から山茶碗片のほか土師器の皿、くの字状口縁鍋が出土しており、建物の時期は中世後期（戦国時代）と考えられる。

ＳＢ－９（第32図）　Ｐ・Ｑ－17・18区で検出された３間四方の総柱建物である。主軸方位はＮ－１°－Ｗである。規模は南北6.3ｍ×6.5ｍを測る。柱穴は平面が円形・楕円形を呈するものが多く、径30～65㎝、深さは20～45㎝とばらつきがある。出土遺物として、Ｐ１から土師器の皿（第62図259）が出土したほか、ほかの柱穴からも須恵器や灰釉陶器、山茶碗片、そして土師器の皿、鍋などが出土しており、建物の時期は中世後期（戦国時代）と考えられる。

ＳＢ－10（第33図）　Ｎ・Ｏ－19区で検出された４間×２間の建物である。主軸方位はＮ－26°－Ｗである。規模は9.6ｍ×4.8ｍを測る。柱穴は平面が円形・楕円形を呈するものが多く、径50～80㎝、深さは15～50㎝とばらつきがある。柱穴のいくつかには底に根石が見られ、これは重複した別の建物に伴うと思われる。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から陶器の擂鉢、土師器のくの字状口縁鍋、半球形鍋、皿が出土しており、建物の時期は中世後期（戦国時代）と考えられる。

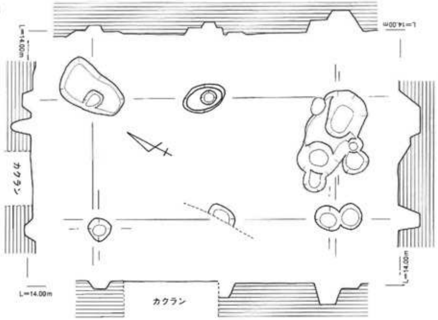
ＳＢ－11（第33図）　Ｑ－19区で検出された２間×１間の建物である。主軸方位はＮ－４°－Ｗである。規模は3.55ｍ×2.1ｍを測る。柱穴は平面が円形・楕円形を呈するものが多く、径25～55㎝、深さは20～45㎝とばらつきがある。出土遺物として、Ｐ１から凝灰岩製の茶臼（第62図260）が出土している。茶臼は破片で、柱穴の壁面に偏って出土していることから柱の固定を意図して再利用されたものだろう。このほか図化していないが陶器の碗や鉢、土師器の半球形鍋や皿などが出土しており、建物の時期は中世後期（戦国時代）と考えられる。

ＳＢ－12（第34図）　Ｏ－20区で検出された２間×１間の建物である。主軸方位はＮ－27°－Ｗである。規模は6.2ｍ×3.3ｍを測る。柱穴は平面が円形または楕円形を呈し、径50～100㎝、深さは35～50㎝とばらつきがある。カクランのため、南東隅の柱穴は検出できなかった。出土遺物に図化できるものは無く、柱穴から弥生土器及び土師器片が出土しており、建物の時期は中世後期（戦国時代）と考えられる。

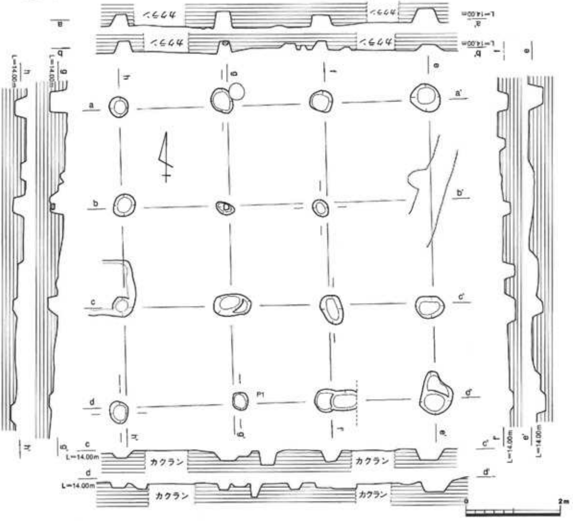
ＳＢ－13（第34図）　Ｐ－16区で検出された２間×１間の建物である。主軸方位はＮ－８°－Ｅである。規模は4.2ｍ×2.5ｍを測る。柱穴は平面が楕円形や不整形なものが多く、径50～80㎝、深さは20～35㎝とばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から山茶碗片、土師器の鍋や皿が出土しており、建物の時期は中世後期～近世と考えられる。

ＳＢ－14（第34図）　０・Ｐ－19・20区で検出された２間×１間以上の建物である。主軸方位はＮ－18°－Ｅである。規模は6.2ｍ×3.3ｍを測る。柱穴は平面が楕円形を呈し、径50～90㎝、深さは30～55

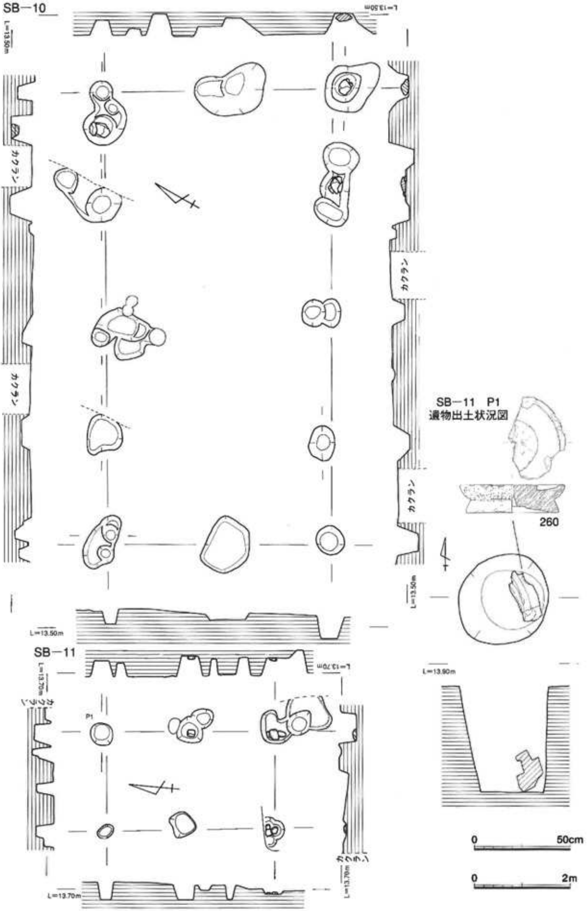
SB−8



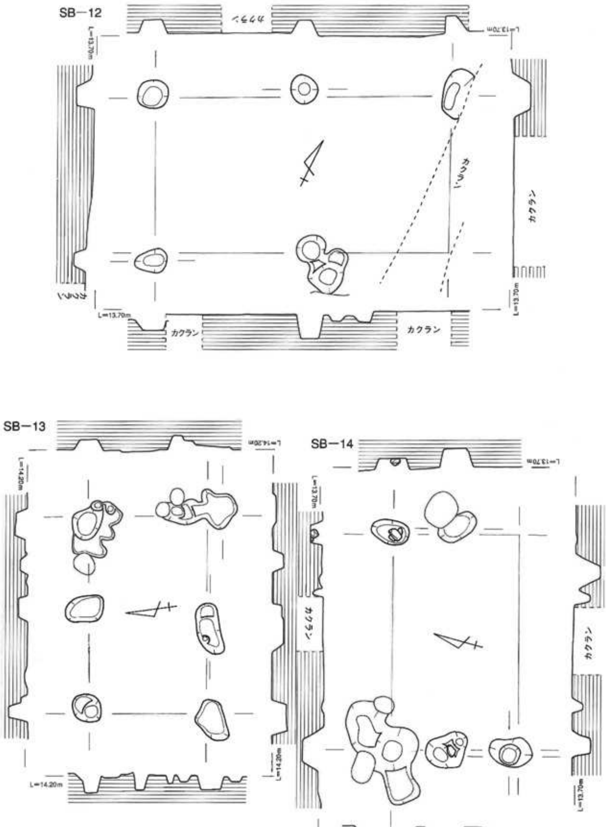
SB−9



第32図　掘立柱建物−4（1／80）



第33図 掘立柱建物−5（1／20・1／80）



第34図　掘立柱建物−6 （1／80）

cmとばらつきがある。北・南辺で中間の柱穴が確認されていないが、これはカクランのためである。また、南東隅の柱穴は検出できなかった。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から陶器の摺鉢・壺、土師器の鍋が出土しており、建物の時期は中世後期～近世と考えられる。

ＳＢ－15（第35図）　Ｓ－15区で検出された２間×１間の建物で、東側に庇と思われる１間分の張り出しがある。主軸方位はＮ－０°－Ｗである。規模は身舎が南北3.5ｍ、東西3.2ｍを測り、庇はさらに東へ1.4ｍの長さである。柱穴は平面形が円形または楕円形を呈し、径30～55cm、深さは15～45cmとばらつきがある。出土遺物にはＰ１から土師器の皿、砥石（第62図261・262）があるほか、図化していないが土師器の鍋などがあり、建物の時期は中世後期～近世と考えられる。庇を持つ構造から、小規模な仏堂または社ではないかと考える。

ＳＢ－16（第36図）　Ｒ－16区で検出された１間四方の建物である。主軸方位はＮ－７°－Ｗである。規模は南北2.0ｍ、東西1.55ｍを測る。柱穴は平面が楕円形を呈し、径35～65cm、深さは30～70cmとばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から山茶碗片や陶器の摺鉢が出土しており、建物の時期は中世後期～近世と考えられる。

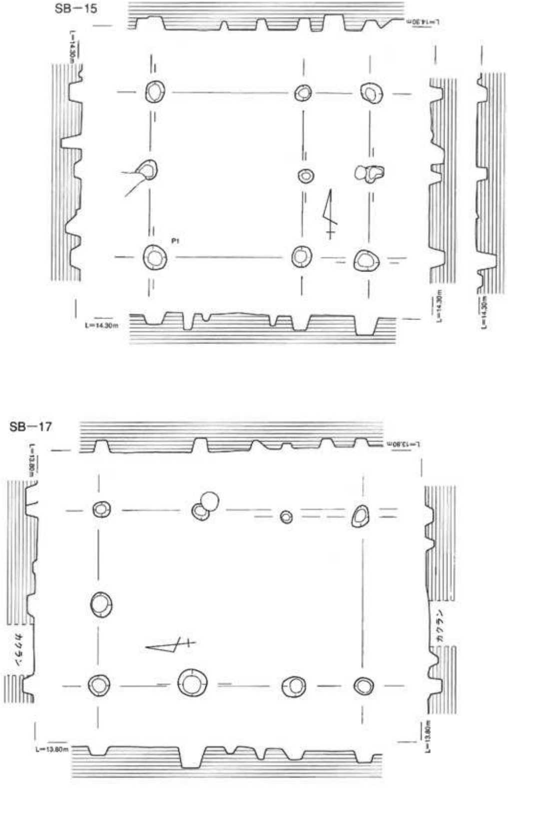
ＳＢ－17（第35図）　Ｎ・Ｏ－19・20区で検出された３間×２間の建物である。主軸方位はＮ－５°－Ｅである。規模は5.6ｍ×3.8ｍを測る。柱穴は平面が円形・楕円形を呈し、径25～60cm、深さは30～45cmとばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から土師器片が出土しており、建物の時期は中世後期～近世と考えられる。

ＳＢ－18（第36図）　Ｏ－20区で検出された１間四方の建物である。主軸方位はＮ－５°－Ｗである。規模は南北2.0ｍ、東西1.6ｍを測る。東側はカクランによって切られているが、建物がこれ以上東へ続くことはない。柱穴は平面が楕円形を呈し、径60～100cm、深さは15～50cmとばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から土師器片が出土しており、建物の時期は中世後期～近世と考えられる。

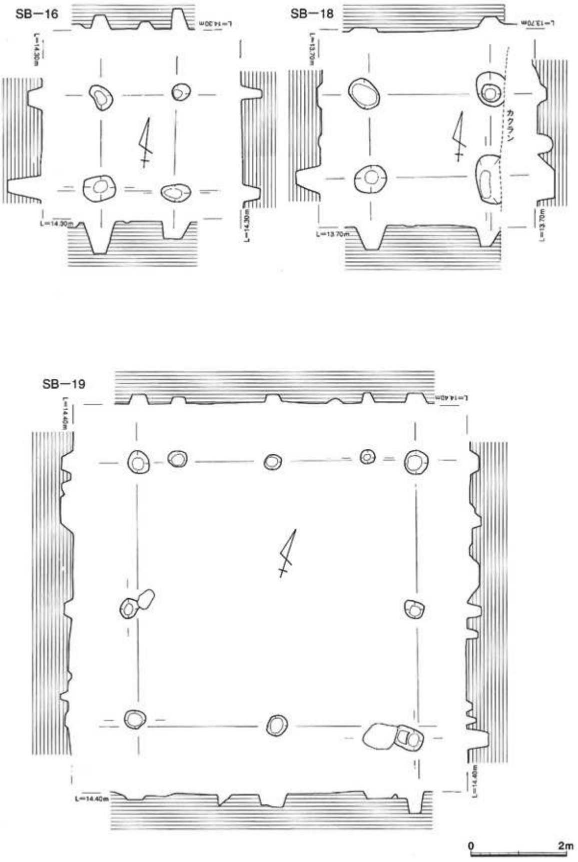
ＳＢ－19（第36図）　Ｒ・Ｓ－14・15区で検出された２間×２間の建物で、北辺のみ補助的な柱穴が２カ所見られる。主軸方位はＮ－18°－Ｗである。規模は南北5.6ｍ×5.9ｍを測る。柱穴は平面が円形および楕円形を呈し、径30～50cm、深さは15～45cmとばらつきがある。建物も規模に比べて柱穴が貧弱で、床を支えるような柱穴は判別できない。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から土師器片が出土しており、建物の時期は中世後期～近世と考えられる。

ＳＢ－20（第37図）　Ｎ・Ｏ－18・19区で検出された２間四方の建物で、柱間は一定していない。北辺中央の柱穴はカクランによって失われている。主軸方位はＮ－12°－Ｗである。規模は南北5.4ｍ、東西4.3ｍを測る。柱穴は平面が楕円形を呈し、西辺中間の特に小規模な柱穴を除けば、径50～80cm、深さは25～60cmとばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から土師器の半球形鍋、磁器片などが出土しており、建物の時期は近世と考えられる。

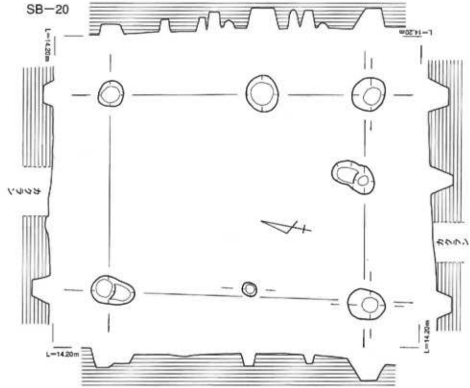
ＳＢ－21（第37図）　Ｏ・Ｐ－19区で検出された２間四方の建物である。主軸方位はＮ－５°－Ｅである。南北辺の中間にある柱穴は小規模で位置がずれており、補助的な柱穴、またはこの建物に伴わない可能性がある。規模は南北3.6ｍ、東西4.5ｍを測る。南北辺中間の柱穴は径30cm、深さ25～30cmと小規模で、ほかの柱穴は平面形が楕円形、もしくは不整形で、径55～100cm、深さは20～50cm

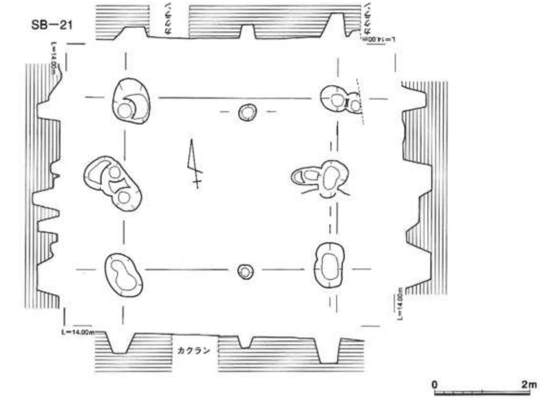


第35図　掘立柱建物－7（1／80）



第36図　掘立柱建物－8（1／80）





第37図 掘立柱建物－9（1／80）

とばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から陶器の志野丸皿・急須・碗、磁器の広東碗、土師器の半球形鍋などが出土しており、建物の時期は近世と考えられる。

ＳＢ－22（第38図）　Ｓ－17・18区で検出された３間×２間の建物である。主軸方位はＮ－７°－Ｅである。規模は5.0ｍ×3.75ｍを測る。柱穴は平面形が楕円形または不整形なものが多く、径50～80㎝、深さは25～70㎝とばらつきがある。出土遺物に図化できるものは無いが、柱穴から陶器の擂鉢・志野丸皿・碗、土師器の鍋・皿が出土しており、建物の時期は近世と考えられる。

４．柵（第38～40図）

柱穴が一列に並ぶ、あるいは掘立柱建物として完結しないものを柵とした。把握された掘立柱建物や溝などと有機的な関係を示すものは少ないが、屋敷地内の何らかの区画、あるいは目隠塀と思われるものが大半である。確認できた柵はすべて中世以降のものである。

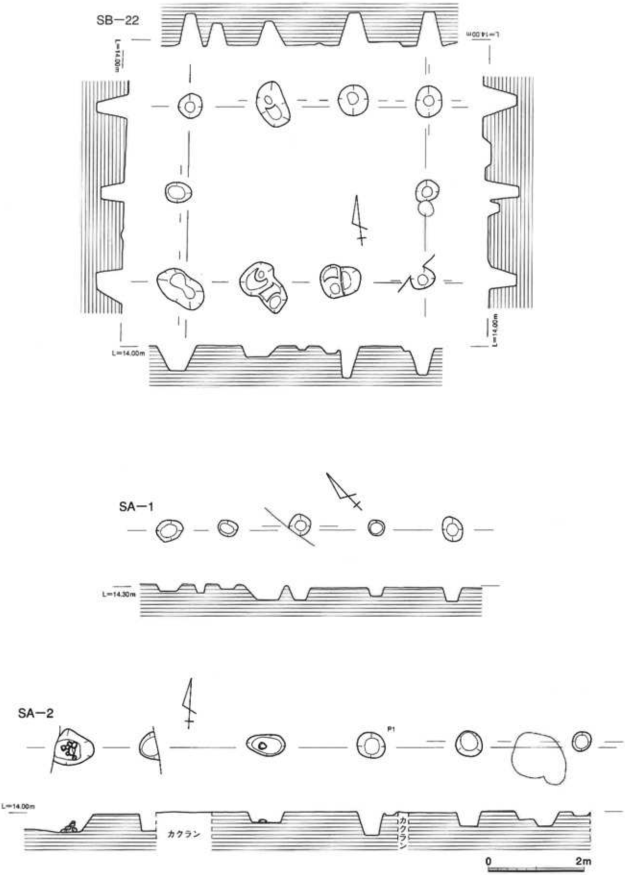
ＳＡ－１（第38図）　Ｓ・Ｔ－16区で検出された柵で、主軸方位はＮ－45°－Ｗである。現状で４間分が確認され、長さは6.0ｍである。柱穴は平面が円形または楕円形を呈し、径35～50㎝程度、深さは15～30㎝とばらつきがある。出土遺物に図化できるものはないが、柱穴から灰釉陶器の碗、山茶碗片などが出土しており、遺構の時期は中世前期と考えられる。中世前期以降と考えられるＳＢ－５とは主軸がほぼ近似しており、その目隠し塀であろう。

ＳＡ－２（第38図）　Ｍ・Ｎ－19区で検出された柵で、主軸方位はＮ－87°－Ｅである。現状で５間分が確認され、西側は調査区外へと続く可能性がある。長さは10.9ｍである。柱穴は平面が円形または楕円形を呈し、径40～80㎝程度、深さは25～50㎝とばらつきがある。一部の底には根石が存在する。出土遺物として、Ｐ１から磁器の青磁碗、陶器の端反皿（第62図263・264）が出土したほか、図化はできなかったが陶器の擂鉢、土師器のくの字状口縁鍋・皿などが出土しており、遺構の時期は中世後期（戦国時代）と考えられる。

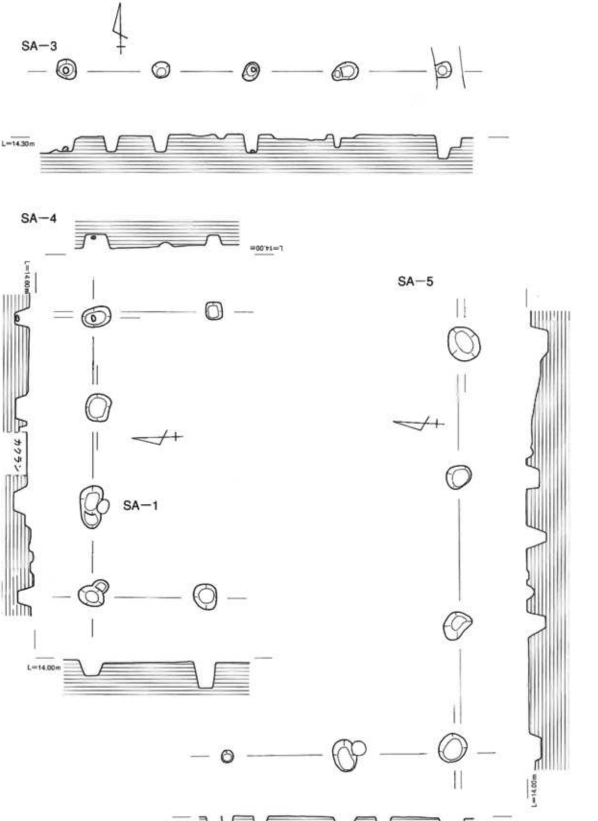
ＳＡ－３（第39図）　Ｒ・Ｓ－16区で検出された柵で、主軸方位はＮ－90°－Ｗである。４間分が確認され、長さは8.0ｍである。柱穴は平面が円形または楕円形を呈し、径30～45㎝程度、深さは25～50㎝とばらつきがある。出土遺物に図化できるものはないが、土師器のくの字状口縁鍋、皿などが出土しており、遺構の時期は中世後期（戦国時代）と考えられる。

ＳＡ－４（第39図）　Ｐ－18・19区で検出された柵で、コの字形に柱穴が並ぶ。南片の柱穴が確認できない掘立柱建物の可能性もある。主軸方位はＮ－４°－Ｅである。５間分あり、長さは東西6.0ｍ、南北2.4～2.6ｍである。柱穴は平面が楕円形または方形を呈し、径40～60㎝程度、深さは20～55㎝とばらつきがある。出土遺物に図化できるものはないが、土師器の皿などが出土しており、遺構の時期は中世後期～近世と考えられる。ＳＡ－４に囲まれた内部に特別な施設は見あたらない。

ＳＡ－５（第39図）　Ｓ－18区で検出された柵で、Ｌ字形に屈曲して柱穴が並び、ＳＡ－６とは柱穴が重複する。主軸方位はＮ－３°－Ｗである。現状で５間分が確認され、長さは東西8.7ｍ、南北4.9ｍである。北端の柱穴は規模が小さく、ＳＡ－５に伴うものではないかもしれない。柱穴は平面が



第38図　掘立柱建物−10、柵−1（1／80）


SA−3
L=14.30m
SA−4
L=14.00m
SA−5
SA−1
カクラン
L=14.00m
L=14.00m
L=14.00m
L=14.00m
0
2m

第39図 柵−2（1／80）

楕円形を呈し、北端の柱穴を除いて径50～80cm程度、深さは25～40cmである。出土遺物に図化できるものはないが、柱穴から土師器の鍋・皿が出土しており、遺構の時期は中世後期～近世と考えられる。

ＳＡ－６（第40図）　Ｓ－18区で検出された柵で、ＳＡ－５とは柱穴が重複する。主軸方位はＮ－81°－Ｗである。現状で５間分が確認され、長さは9.2ｍである。柱穴は平面が円形または楕円形を呈し、径30～60cm程度、深さは30～60cmとばらつきがある。出土遺物に図化できるものはないが、柱穴から陶器の天目茶碗、土師器の半球形鍋・皿などが出土しており、遺構の時期は中世後期～近世と考えられる。

ＳＡ－７（第40図）　Ｏ－20区で検出された柵で、ＳＢ－12と重複している。主軸方位はＮ－13°－Ｗである。東西に３間分、さらに南へ２カ所が１間分張り出した形状をしており、その意図は不明である。長さは東西7.2ｍ、南北1.6～1.8ｍである。柱穴は平面が楕円形を呈し、径40～80cm程度、深さは30～45cmとばらつきがある。出土遺物に図化できるものはないが、柱穴から陶器の皿、磁器の染付、土師器の鍋片などが出土しており、遺構の時期は近世と考えられる。

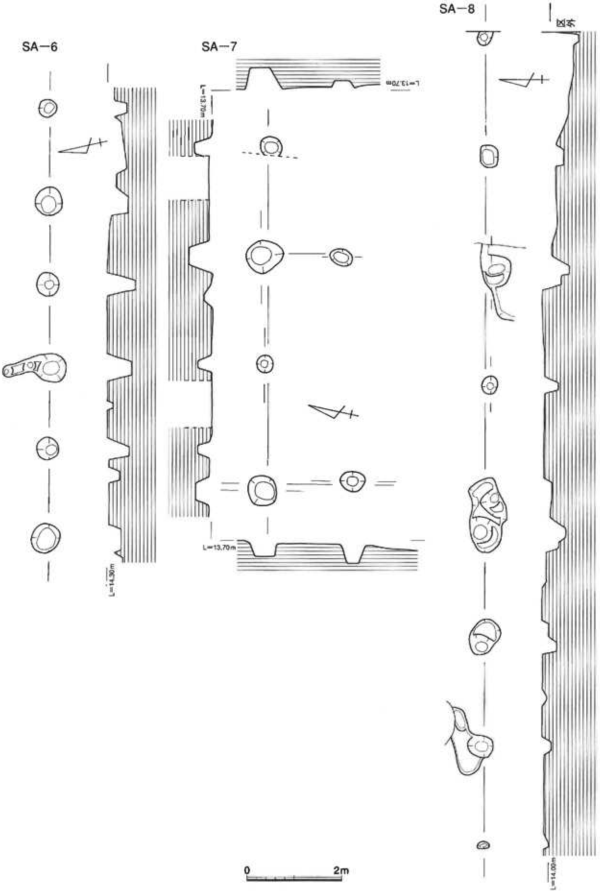
ＳＡ－８（第40図）　Ｒ～Ｔ－17区で検出された柵で、Ｂ区を東西に横断する。主軸方位はＮ－90°－Ｗである。現状で７間分が確認されており、東・西側は調査区外へと続くため、長さは17.2ｍ以上である。柱穴は平面が円形または楕円形を呈し、径25～50cm程度、深さは20～80cmとばらつきがある。出土遺物に図化できるものはないが、柱穴から陶器の志野丸皿・盤、土師器の半球形鍋などが出土しており、遺構の時期は近世と考えられる。その規模や配置から、敷地内を区画する施設と考えられる。

5．井戸（第41図）

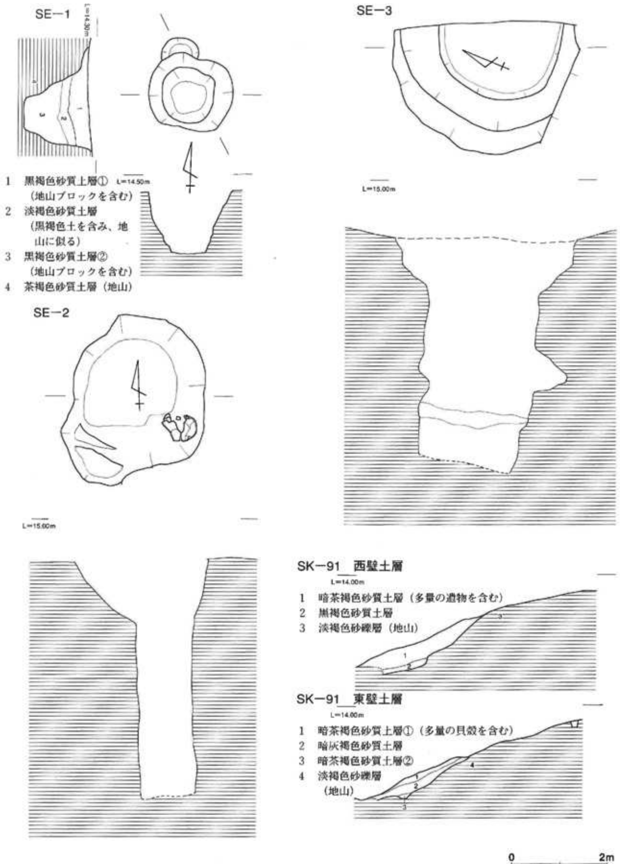
今回の調査では３基の井戸を検出した。このうちＳＥ－１は中世前期の遺構であり、極めて浅く、湧水点まで掘られていない点で他の井戸とはやや性格が異なる。ＳＥ－２は中世後期（戦国時代）、ＳＥ－３は近世の井戸で、両者は最後に重機を使用して断ち割りを行っている。

ＳＥ－１（第41図）　Ｐ－16区で検出された井戸である。平面形は楕円形を呈し、長径1.8ｍ、短1.5ｍを測り、深さは1.35ｍと極めて浅く、あるいは井戸ではなく水溜遺構の可能性もある。北側には楕円形の土壙が重複するように見えるが、埋土は分層できず、ＳＥ－１に伴うステップ状の遺構と思われる。埋土は中間の淡褐色砂質土を挟み、上層と最下層は黒褐色砂質土である。さして規模の大きな遺構ではないものの、遺物は比較的豊富に出土しており、大半が最下層から出土している。出土遺物には山茶碗、小皿、中世陶器の壺、土師器の伊勢型鍋など（第63図265～280）があり、とくに山茶碗は底部外面に「東」あるいは花押と思われるものが書かれた墨書土器を含んでいる。遺構の時期は中世前期であろう。墨書土器は当時の遺跡の性格をさぐるうえで重要である。

ＳＥ－２（第41図）　Ｓ－17区で検出された井戸である。平面形はほぼ円形を呈し、東西2.8ｍ、南北3.2ｍを測る。南西側には2段の階段状スロープがあり、作業用の進入路ではないかと思われる。重機による断ち割りで深さは5.2ｍ以上と判明している。断面を見ると、上から1.3ｍほどのところまでは緩やかに傾斜しながら幅を狭め、そこから下はほぼ径1.2ｍ前後で一定している。重機の断割り



第40図 柵－3（1／80）



第41図 井戸 近世土壙断面（1／80）

によって底に曲げ物の井筒があることが分かったが、著しい湧水と埋土の大がかりな崩落により、図化及び取り上げることはできなかった。なお、上面の南東側に常滑産陶器の大甕が存在するが、これは井戸の埋没後ここに据えられたものである。出土遺物には陶器の天目茶碗、擂鉢、直縁大皿、壺、土師器の羽釜形鍋、茶釜形鍋、くの字状口縁鍋が出土しており、前述のように常滑産陶器の甕は混入品である（第64図281～第65図307）。遺構の時期は中世後期（戦国時代）を中心に、近世初頭（17世紀）まで継続したと考えられる。

ＳＥ－３（第41図）　Ｑ－17区で検出された井戸で、東側は調査区外である。平面形は楕円形を呈すると思われ、最上部の南北の長さは3.9ｍを測り、重機による断ち割りで深さは５ｍ以上と判明している。断面を見ると、上から1.2ｍほどのところまでは傾斜を変えながら幅が狭まり、そこから下はほぼ径2.2ｍ前後で一定している。途中崩落のため壁面のえぐれた部分が認められ、その付近では崩落土が堆積するが、その上下では埋土はあまり変わりない。未完掘のため、井戸底の構造物の有無は分からない。出土遺物には陶器の天目茶碗、丸碗、皿、菊花皿、擂鉢、徳利、鉄絵鉢、甕、土師器の茶釜形鍋、砥石（第66図308～327）などがあり、遺構の時期は近世初頭と考えられる。

６．溝（第５～11図・42）

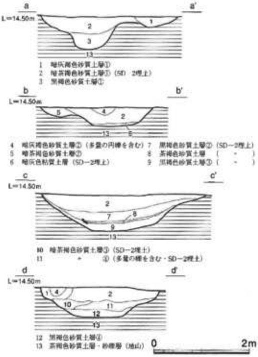
溝は調査区の全域で検出されている。前述した弥生時代後期前葉の環濠（ＳＤ－１）及び同時期の性格不明の溝・ＳＤ－７以外は中世～近世の溝で、多くが屋敷地の区画を意図した区画溝と考えられる。ただし、中世後期～近世初頭の溝であるＳＤ－２は他に比べ規模が大きく、通常の集落の区画溝とは異なると思われる。以下では、ＳＤ－１以外の溝について説明する。

ＳＤ－２（第６・８・42図）　Ａ区のＭ－14～20区、Ｎ～Ｐ－14区で検出された規模の大きな溝で、東西に54ｍほど延びた後南に屈曲して23.5ｍほど延びており、いずれも調査区外まで続いている。Ｂ区において、調査区北端に沿って検出されたＳＤ－６の一部がこれに該当する可能性が高いが、詳細は分からない。Ｍ～Ｏ－14区付近ではＳＤ－９に切られる形で重複している。

規模は検出された長さ77.5ｍ、幅2.0～3.5ｍ、深さ35～75㎝を測る。断面は浅い逆台形（箱形）を呈する。深さは南北に延びる部分では平均して60㎝を越え、Ｎ－15区で段をなして底が浅くなり、それより東は深さ40㎝以内となる。底のレベルは東から西へ、北から南へ行くにつれじょじょに低くなり、Ｏ－14区とＭ－20区でのレベル差はおよそ55㎝である。土層断面（第42図）によれば、いずれのベルトでも観察される第２層（暗茶褐色砂質土層①）は下端のレベルはほぼ同じとなるため、溝は掘り直された可能性がある。なお、Ｍ－16区付近では下層に多量の礫を含んでいた。

出土遺物には陶器の天目茶碗、丸碗、腰折皿、鉄絵皿、志野丸皿、大皿、茶入、瓶子、擂鉢、甕、磁器の青磁碗、染付皿、土師器のくの字状口縁鍋、半球形鍋、内弯口縁鍋、皿、石鉢など（第67図328～第68図401）があり、遺構の時期は中世後期（戦国時代）～近世初頭と考えられる。これらの時期は、平成15年度に東隣の西側遺跡第２次調査区で多数検出された地下式坑とほぼ同じである。

溝の性格を、遺物及び内部の建物配置から把握することは難しい。他の溝と明らかに規模が異なる



第42図　ＳＤ－２土層図（１／80）

点から、なんらかの大型区画に伴うと思われる。中世後期にはこの付近に現存寺院である正太寺（真言宗）・桃林寺（臨済宗）が存在しており、寺院地の区画溝となる可能性がある。

ＳＤ－３（第７図）　Ａ区のＭ－19～21区で検出された南北方向に延びる小規模な溝で、南側は調査区外、北側はカクランに切られる形で途切れる。北側にはさらに延びていたと思われるが、ごく浅い溝のため削平されてしまったのだろう。

規模は、検出された長さ17.5ｍ、幅45～60㎝、深さ15～25㎝を測る。断面は浅いＵ字形を呈する。Ｍ－20・21区の境界付近で幅が広がり、深さも40㎝を越える部分があるが、これは別の遺構（土壙）と重複したためである。底のレベルは北から南へじょじょに下がり、北端と南端でのレベル差はおよそ25㎝である。

出土遺物には陶器の腰錆茶碗、土師器の皿など（第69図402・403）があり、遺構の時期は近世である。遺構の性格は不明だが、その規模から屋敷地などの区画溝と考えられる。

ＳＤ－４（第７図）　Ａ区のＮ－20・21区で検出された溝で、南北に延び、緩やかに南西方向へ屈曲している。両端はいずれも調査区内で途切れている。

規模は、検出された長さ14ｍ、幅は南北に延びる部分が1.3～1.5ｍ、南西方向へ延びる部分が最大2.5ｍ、深さは前者が15㎝前後、後者が５㎝前後とごく浅い。断面は皿形を呈する。底のレベルは北から南へじょじょに下がり、北端と南西端でのレベル差はおよそ25㎝である。

出土遺物には常滑産陶器の片口鉢（第69図404）があり、遺構の時期は中世後期（戦国時代）と考えられる。遺構の性格は不明だが、直線的に延びた後屈曲する特徴や、明らかに削平を受けており本来の形状をとどめていないことから、何らかの建物基壇に伴う雨落ち溝の可能性がある。

ＳＤ－５（第８・９図）　Ａ区のＱ－17・18区で検出された溝で、北北東～南南西に延び、全体的に緩やかに彎曲している。北側は調査区外まで延び、南端は調査区内で途切れている。

規模は、検出された長さ11ｍ、幅は30～50㎝、深さ５～15㎝とごく浅い。断面は皿形を呈する。底のレベルは北から南へじょじょに下がり、北端と南西端でのレベル差はおよそ10㎝である。

出土遺物には磁器・染付の丸碗や皿、軒桟瓦（第69図405～408）があり、遺構の時期は近世と考えられる。

ＳＤ－６（第８・10図）　Ｂ区のＲ・Ｓ－14区、Ｔ－15・16区で検出された溝で、調査区の北端に沿って南北に延びた後、南に屈曲してＴ－16区で途切れている。ＳＤ－８とは2.5～3.0ｍ離れ、ほぼ並行して存在しており、両者は同時存在した遺構と考えられる。

規模は、検出された長さ33.5ｍ、幅は西端の最も広いところで1.1ｍ以上、南北に延びる部分が0.6

～0.7ｍ、深さは15～20㎝程度である。断面は浅い逆台形を呈する。底のレベルは西～東～南へとじょじょに下がり、西端と南端でのレベル差はおよそ20㎝である。

出土遺物には山茶碗、陶器の折縁小皿、土師器のくの字状口縁鍋、皿（第69図409～414）がある。遺物から導かれる年代は中世後期（戦国時代）～近世初頭であるが、ＳＤ－８と並行するため、遺構の時期は近世と考えるのが妥当だろう。むしろ、これら遺物は重複するＳＤ－２に伴うと考える。

ＳＤ－７（第10・11図）　Ｂ区のＲ－16～18区で検出された溝で、直線的に南北に延び、南は土壙に、北はＳＤ－１に切られている。

規模は、検出された長さ18.5ｍ、幅は1.0～1.15ｍ、深さは10～25㎝とごく浅い。断面は箱形を呈する。底のレベルは北から南へじょじょに下がり、北端と南西端でのレベル差はおよそ25㎝である。Ｒ－17区で一端途切れ、幅30㎝程度の陸橋状になる。

出土遺物には縄文土器片、土師器の甕、有段口縁壺、高坏など（第69図415～422）があり、遺構の時期は環濠と同じ弥生時代後期前葉である。極めて浅い溝であり、環濠以外に周辺には同時期の遺構がないためその性格は明らかにしがたいが、方形周溝墓とするには状況証拠が乏しく、集落内の何らかの区画溝であったと考えたい。

ＳＤ－８（第８・10図）　Ｂ区のＯ・Ｐ－14・15区、Ｒ－14区、Ｓ－14～18区で検出された溝で、東西に延びた後、南に屈曲して長く延びる。西端は調査区外へと延びており、恐らくＳＤ－９と同一の溝になると思われる。南端はＳ－18区内で途切れるが、さらに南に続く可能性がある。

規模は、検出された長さ51ｍ、幅は南北に延びる部分が0.6～1.0ｍ、深さは25～30㎝である。断面は箱形を呈する。底のレベルは西から東、さらに南へとじょじょに下がり、西端と南端でのレベル差はおよそ50㎝である。

出土遺物には陶器の壺、磁器の丸碗、皿（第69図423～428）があり、遺構の時期は近世と考えられる。先述のようにＳＤ－６が2.5～3.0ｍ離れて並行しており、両者は同時存在したと思われる。その場合、両溝に挟まれた部分は道路遺構であり、溝はその側溝であったと考えられる。さらに、ＳＤ－８とＳＤ－９が同一の溝であれば、これに囲まれた範囲は東西約63ｍを測る広大なものになる。現状では集落の大区画を囲むものと想定するが、あるいはＳＤ－２の区画を踏襲したのかもしれない。

ＳＤ－９（第６・８図）　Ａ区のＭ～Ｐ－14区で検出された溝で、東西に延び、Ｍ－14区で南側に屈曲する。ＳＤ－２と重複し、南端は把握できない。ＳＤ－８とは同一の遺構と思われる。

規模は、検出された長さ68.5ｍ（東西26.5ｍ、南北15.5ｍ）、幅は60～90㎝、深さは10～20㎝とごく浅い。断面は箱形を呈する。底のレベルは東から西へじょじょに下がるが、南北部分はほとんどレベル差が無い。東端と西端コーナーでのレベル差はおよそ20㎝である。

出土遺物には陶器の碗、皿、鍋、擂鉢、磁器の筒形湯呑（第70図429～441）があり、遺構の時期は近世と考えられる。遺構の性格はＳＤ－８を参照されたい。

７．土壙（第11・41・43～51図）

土壙には土器集積、柱穴、廃棄土壙、その他性格不明のものを一括している。帰属時期は弥生時代

～近世まで多様であり、弥生時代の柱穴には、平地式住居や高床倉庫だけでなく、削平によって掘方を失った竪穴住居の柱穴も含まれると思われるが、その判別は困難である。したがって、以下では検出時の形態から判断可能な記述のみに留める。また、帰属時期ごとに説明を加えるが、説明の便宜上遺構名は各時期を通じた通し番号にしている。なお、弥生時代の明確な掘り方を伴わない土器集積は、便宜的に不明遺構（ＳＸ）としたが、数が少ないためここで合わせて説明する。

Ａ．弥生時代～古代の土壙

ＳＸ－１（第43図）　Ｍ－14区、Ａ区の西端で検出された土器集積で、わずかに掘り込みを伴うようだが、土器は底から完全に浮いた状態で出土している。出土遺物には弥生土器の甕片（第71図442）があり、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＸ－２（第43図）　Ｍ－14区、Ａ区西端の壁面にかかるかたちで検出された土器集積で、地山面からは浮いた状態であり、遺構の形状は把握できない。出土遺物には弥生土器の台付甕（第71図443・444）があり、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＸ－３（第43図）　Ｍ－15区の、ＳＤ－２西側肩付近で検出された。弥生土器の台付甕の脚部（第71図445・446）のみが出土しており、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－１（第43図）　Ｍ－14区の、Ａ区北西隅で検出された柱穴である。平面形は楕円形で、規模は長径35cm、短径30cm、深さ25cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には土師器の小型壺の体部（第71図447）があり、遺構の時期は古墳時代中期と考えられる。

ＳＫ－２（第43図）　Ｍ－15区の北西端付近で検出された柱穴である。平面形は楕円形で、規模は長径40cm、短径30cm、深さ25cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の高坏（第71図448）があり、転倒して底から10cmほど浮いた状態で出土した。遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－３（第43図）　Ｍ－15区の西隅（Ａ区西端）付近で検出された柱穴である。平面形は楕円形で、規模は長径40cm、短径30cm、深さ25cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の高坏（第71図448）があり、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－４（第43図）　Ｍ－15区の東端で検出された土壙である。平面形は溝状で、規模は長さ3.75ｍ、幅1.2～1.35ｍ、深さ65cmを測る。埋土は黒褐色砂質土で、底から約30cmほど浮いた位置で焼土塊が出土しており、断面によれば、東側の肩から焼土ブロックの混ざった土が流れ込むように分布する。被熱の痕跡は底や側面には認められず、ここで火を用いた遺構かどうかは疑問が残る。出土遺物には、図化はしていないが弥生土器の台付甕があり、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－５（第43図）　Ｎ－14区の北端（Ａ区北端）付近で検出された柱穴である。平面形は楕円形で、規模は長径50cm、短径45cm、深さ20cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の高坏（第71図450）があり、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－６（第43図）　Ｎ－16区の北寄りで検出された浅い土壙である。平面形は楕円形で、規模は長径55cm、短径45cm、深さ10cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の台付甕（第71図451）があり、底に接して出土した。遺構の時期は弥生時代後期前葉だろう。

ＳＫ－７（第43図）　Ｎ－16区の東寄りで検出された土壙である。平面形は楕円形で、規模は長径75cm、短径50cm、深さ30cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の小型高坏または脚付壺（第71図452）があり、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－８（第43図）　Ｎ－18区の中央東端で検出された柱穴である。平面形は円形で、規模は径25cm、深さ25cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の壺（第71図453）があり、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－９（第43図）　Ｎ－18区の東寄りで検出された柱穴である。平面形は円形で、規模は長径50cm、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の壺（第71図454）があり、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－10（第43図）　Ｎ－18区の中央北寄りで検出された柱穴である。平面形は円形で、規模は径30cm、深さ30cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の台付甕（第71図455）があり、底から５～10cmほど浮いて出土した。遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－11（第43図）　Ｏ－14区の西寄りで検出された柱穴である。平面形は円形で、規模は径50cm、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物にはほぼ完形を呈した土師器の壺（第71図456）があり、底から20cmほど浮いて出土した。遺構の時期は古墳時代中期と考えられる。

ＳＫ－12（第43図）　Ｏ－16区の南西寄りで検出された土壙で、実際には２つの土壙が重複したようである。平面形は不整形で、規模は南北1.8ｍ、東西1.5ｍ、深さ20～30cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の壺と思われる底部（第71図457・458）があり、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

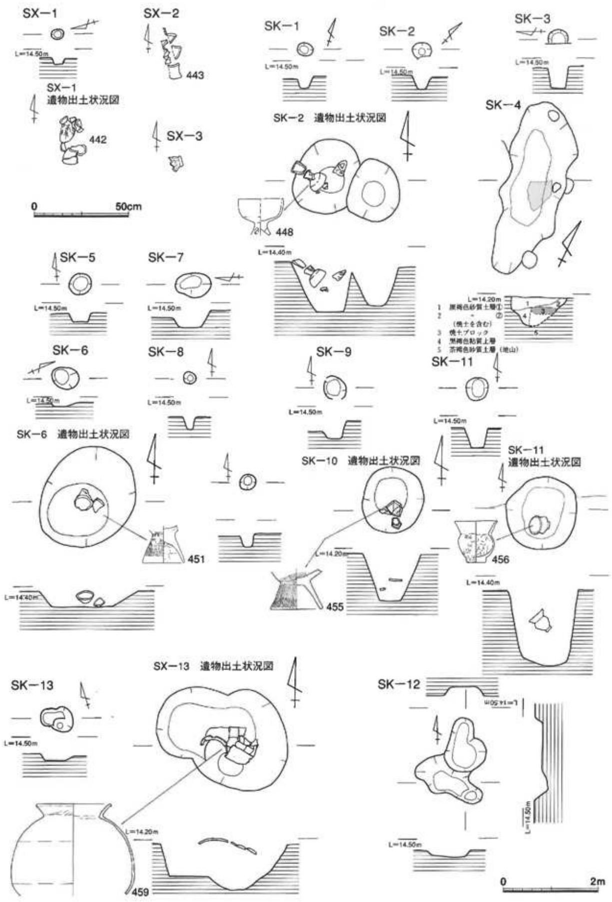
ＳＫ－13（第43図）　Ｏ－17区の南東寄りで検出された土壙である。平面形は楕円形で、柱穴と土壙が重複したような形態で、東側は一段深くなる。規模は長径70cm、短径40～55cm、深さは西側で18cm、一段低い東側で25cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には土師器の広口壺（第71図459）があり、底から20cmほど浮いて出土した。遺構の時期は古墳時代中期と考えられる。

ＳＫ－14（第44図）　Ｐ－15区、Ｂ区の東端で検出された柱穴で、東側は調査区外まで延びているほか、南側は奈良時代の溝に切られている。したがって平面形は三角形に残されるに過ぎず、規模は東西・南北とも1.35ｍ以上、深さは10cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の台付甕（第71図460・461）があり、遺構の底に接するようにして出土した。遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－15（第44図）　Ｐ－15区の中央やや北寄りで検出された土壙で、２つの柱穴が重複したような形状を呈し、底は東側が一段低くなる。平面形は楕円形で、規模は長径50cm、短径30cm、深さ西側で10cm、東側で20cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の無頸鉢（第71図462）があり、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－16（第44図）　Ｐ－17区の中央南端で検出された浅い柱穴である。平面形は円形で、規模は径25cm、深さ10cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器のミニチュア壺（第71図463）があり、体部中位に稜を持った形状から、遺構の時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

ＳＫ－17（第44図）　Ｎ・Ｏ－15区で検出された土壙である。平面形は長方形で、規模は長さ4.0



第43図 土壙−1(弥生時代、1/20・1/80)

～4.15ｍ、幅1.9～2.3ｍ、深さ20㎝を測る。埋土は黒褐色砂質土で、地山ブロックを含んでいる。図化していないが、底は中央が南北方向にわずかに高まっており、あるいは連結した２つの土壙の可能性もあるが、埋土では区別できない。当初は竪穴住居とも考えたが、カマドや主柱穴、壁溝は一切確認されていない。出土遺物には縄文土器の深鉢や弥生土器、須恵器の坏、土錘（第72図467～471）があり、遺構の時期は古墳時代終末期～奈良時代と考える。ただしＳＫ－18に形状が類似しており、時期は平安時代（10世紀）までさがる可能性がある。

ＳＫ－18（第44図）　Ｎ・０－15区で検出された土壙で、西側はＳＫ－20に切られている。平面形は南側が内側に入り込むもののほぼ長方形で、底は凹凸が著しい。規模は長さ4.95ｍ以上、幅2.35～2.65ｍ、深さ５～15㎝とごく浅い。埋土は暗茶褐色砂質土で、地山ブロックを含んでいる。出土遺物には近畿式銅鐸の飾耳片、弥生土器の高坏のほか、須恵器の壺、土師器の清郷型鍋、土錘（第72図472～476）があり、遺構の時期は平安時代（11世紀）と考えられる。形態や埋土がＳＫ－17に近似しており、これと同様の性格だろう。

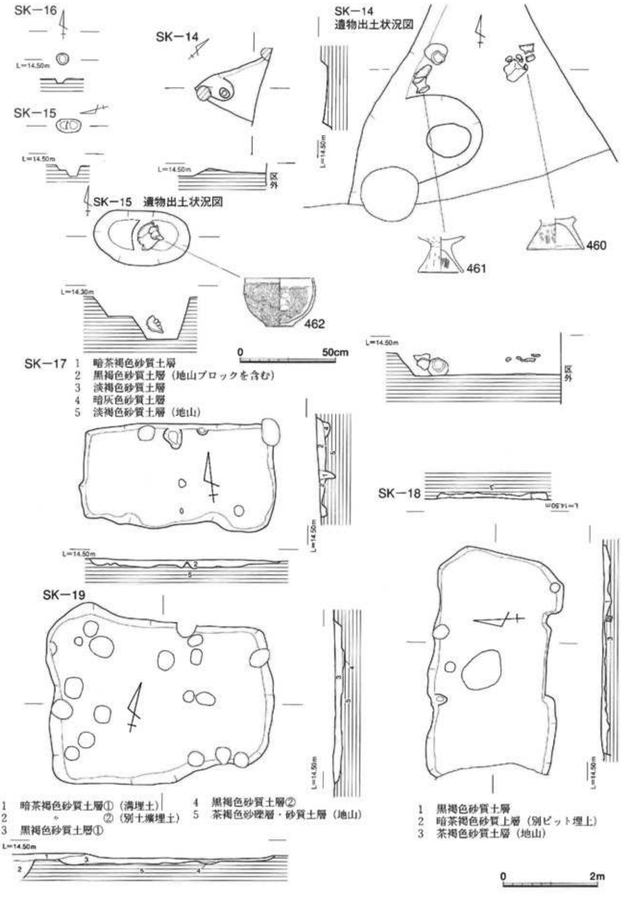
ところで、銅鐸の飾耳片は底から15㎝ほど浮いた状態で出土している。遺構掘削の早い段階でその存在を把握したため慎重に掘り下げたが、近接して同一の埋土中から須恵器片が出土し、また明確な弥生時代の遺構を確認することはできなかった。したがって、銅鐸の飾耳片は他の弥生土器と同様、後世の土壙に混入したものと解釈すべきである。弥生時代後期前葉の遺物を主体とする遺物包含層は、本遺構の付近まで及んでおり、恐らく当初はこの包含層中に銅鐸片も含まれ、11世紀になって包含層上から本遺構が掘削された時に、混入したのだろう。

ＳＫ－19（第44図）　Ｎ－18区で検出された柱穴である。平面形は台形で、規模は長さ5.2ｍ、幅2.95～3.85ｍ、深さ20㎝を測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の高坏、坏、土師器の把手（第72図482～485）があり、遺構の時期は古墳時代終末期～奈良時代と考えられる。

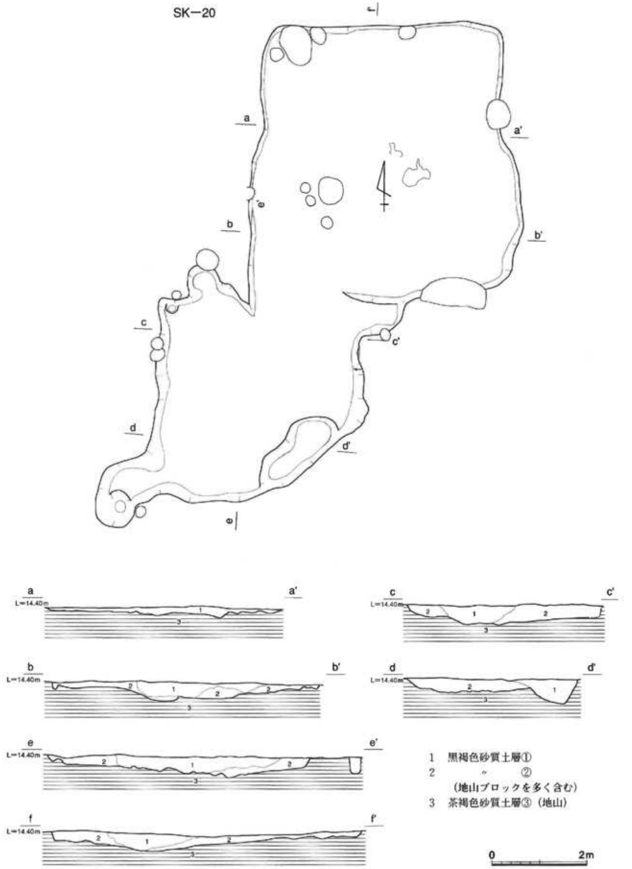
ＳＫ－20（第45図）　Ｍ－16・Ｎ－15・16区で検出された大型の土壙である。平面形は不整形で、方形を呈した北側の土壙に不整形な南側の土壙が重複したような形状であり、複数の土壙が重複した可能性がある。床面は凹凸が著しい。また床面の一部に焼土が存在する。規模は各断面位置において、Ａ－Ａ′間で長さ4.95ｍ、深さ５～25㎝、Ｂ－Ｂ′間で長さ5.65ｍ、深さ10～40㎝、Ｃ－Ｃ′間で長さ4.1ｍ、深さ25～40㎝、Ｅ－Ｅ′間で長さ5.55ｍ、Ｆ－Ｆ′間で長さ6.5ｍを測る。埋土は黒褐色砂質土で、下層は地山ブロックを含んでいる。出土遺物には弥生土器、須恵器の坏（第72図477～481）があり、遺構の時期は古墳時代終末期～奈良時代と考えられる。

遺構の性格は不明確だが、ＳＫ－17・18、さらに後述するＳＫ－21に特徴が類似しており、同様な性格が想定される。その場合、時期も平安時代（11世紀）まで下がる可能性が生じる。焼土が検出されたのは本遺構のみである。かりに北側の略方形を呈した部分が何らかの竪穴建物跡である場合、焼土は地床炉の可能性がある。ただし出土遺物から見た年代とは合わず、あるいは何らかの作業場・工房跡とも考えたが、それを示す遺構・遺物は認められなかった。

ＳＫ－21（第46図）　Ｎ・Ｏ－15・16区で検出された土壙である。平面形は長方形で、いくつかの方形・長方形を呈した土壙が連結したような形状であり、底は凹凸が著しい。規模は長さ10.15ｍ、深さ10～20㎝、幅は断面位置であるＢ－Ｂ′で2.2ｍ、Ｄ－Ｄ′で2.15ｍ、Ｅ－Ｅ′で3.2ｍを測る。



第44図 土壙ー2（弥生時代、古墳・奈良時代、1／20・1／80）



第45図　土壙−3（古墳・奈良時代、1／80）

埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の高坏、須恵器の坏（第72図486・487）があり、遺構の時期は古墳時代終末期～奈良時代と考えられる。ＳＫ－17や20と同様の性格の遺構であれば、さらに平安時代まで下がる可能性がある。なお、本遺構の東端から、溝が東へ向かって長く伸びており、B区まで達していたが、遺物がまったく出土していないため本遺構との関連性は分からない。

ＳＫ－22（第46図）　Ｎ－16区、A区の西端で検出された土壙で、ＳＨ－５に重複し、西側は調査区外である。方形を呈した土壙のコーナー部分と考えられ、規模は南北3.1ｍ以上、東西1.6ｍ以上を測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には弥生土器の壺、須恵器の坏、広口壺（第72図464～466）があり、遺構の時期は古墳時代終末期～奈良時代と考えられる。

ＳＫ－23（第46図）　Ｎ－16区の東端で検出された土壙である。平面形は楕円形で、規模は長径75㎝、短径65㎝、深さ50㎝を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の坏、土師器の清郷型鍋、土錘（第72図489～492）があり、遺構の時期は平安時代（10世紀）であろう。

ＳＫ－24（第46図）　Ｏ－14区、A区の北端で検出された土壙で、北側は調査区外へと延び、東側は別の土壙に切られている。平面形は楕円形と考えられ、長さは5.2ｍ以上、深さ５㎝と極めて浅い。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物で図化したものはないが、須恵器の古墳時代型坏身の破片が出土しており、立ち上がりは短い。したがって遺構の時期は古墳時代終末期と考えられる。

ＳＫ－25（第46図）　Ｏ－17・18区で検出された土壙である。平面形は不整形で、さまざまな土壙やカクランなどに周囲を切られているため、正確な形状は分からない。規模は東西3.4ｍ、南北3.5ｍ、深さ10～15㎝を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物で図化したものはないが、須恵器の坏、坏蓋、壺、土師器の甕があり、遺構の時期は古墳時代終末期～奈良時代と考えられる。

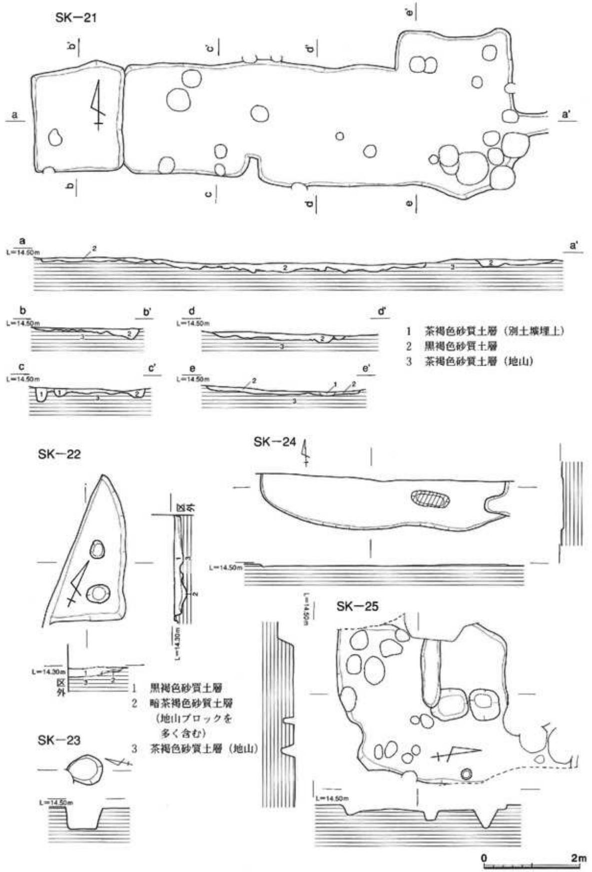
ＳＫ－26（第47図）　Ｏ－17区の南東端で検出された土壙で、南側は溝に切られている。平面形は楕円形で、規模は長径65㎝、短径40㎝以上、深さ40㎝を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には縄文土器の深鉢、土師器の高坏（第72図493・494）があり、高坏は底から18㎝ほど浮いた状態で出土している。遺構の時期は古墳時代中期と考えられる。

ＳＫ－27（第47図）　Ｏ－17区の南端で検出された柱穴である。平面形は円形で、規模は径20㎝、深さ45㎝を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の高坏（第72図495）があり、遺構の時期は古墳時代終末期と考えられる。

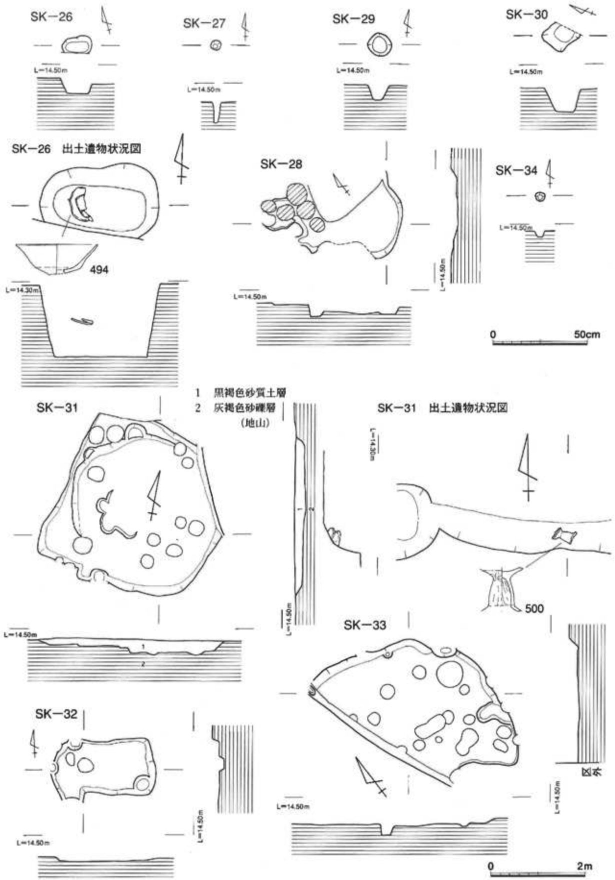
ＳＫ－28（第47図）　Ｏ－17区の中央北寄りで検出された土壙で、南がカクランに切られるほか、ほかの土壙が重複する。平面形は不整形で、規模は東西・南北とも2.4ｍ、深さ25㎝を測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の壺（第72図496）があり、遺構の時期は古墳時代終末期と考えられる。

ＳＫ－29（第47図）　Ｏ－18区の東端で検出された柱穴である。平面形は円形で、規模は径50㎝、深さ30㎝を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の坏（第72図497）があり、遺構の時期は奈良時代と考えられる。

ＳＫ－30（第47図）　Ｏ－18区の西南端で検出された土壙で、東側はカクランに切られている。平面形は不整形で、規模は長さ65㎝以上、幅60㎝、深さ50㎝を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の坏（第72図498）があり、遺構の時期は古墳時代終末期と考えられる。



第46図　土壙−4（古墳・奈良時代、1／80）



第47図 土壙－5（古墳・奈良時代、1／80）

ＳＫ－31（第47図）　Ｐ－16区、Ａ区の東端で検出された土壙で、北側は溝に切られ、東側の一部は調査区外である。平面形は方形で、規模は東西・南北とも3.4ｍ、深さ15～30㎝を測る。床面には段差があり、平面的にはあたかも円形の土壙を方形の土壙が取り込んだような形状を呈している。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の蓋と土師器の高坏（第72図499・500）があり、高坏は壁沿いの床面に接して出土した。遺構の時期は古墳時代終末期～奈良時代と考えられる。

ＳＫ－32（第47図）　Ｐ－18区の中間で検出された土壙である。平面形は隅丸長方形で、規模は長さ2.25ｍ、幅1.2ｍで、深さは10㎝と浅い。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の坏（第72図501）があり、遺構の時期は古墳時代終末期と考えられる。

ＳＫ－33（第47図）　Ｒ－18区とＳ－18区の境界で検出された土壙である。平面形は円形を呈すると考えられ、規模は南北4.4ｍ、東西2.4ｍ以上、深さ10㎝を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の高坏（第72図502）があり、遺構の時期は古墳時代終末期と考えられる。

ＳＫ－34（第47図）　Ｓ－16区で検出された柱穴である。平面形は楕円形で、規模は長径20㎝、短径15㎝、深さ15㎝を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には須恵器の坏身（第72図503）があり、遺構の時期は古墳時代終末期と考えられる。

Ｂ．中世の土壙

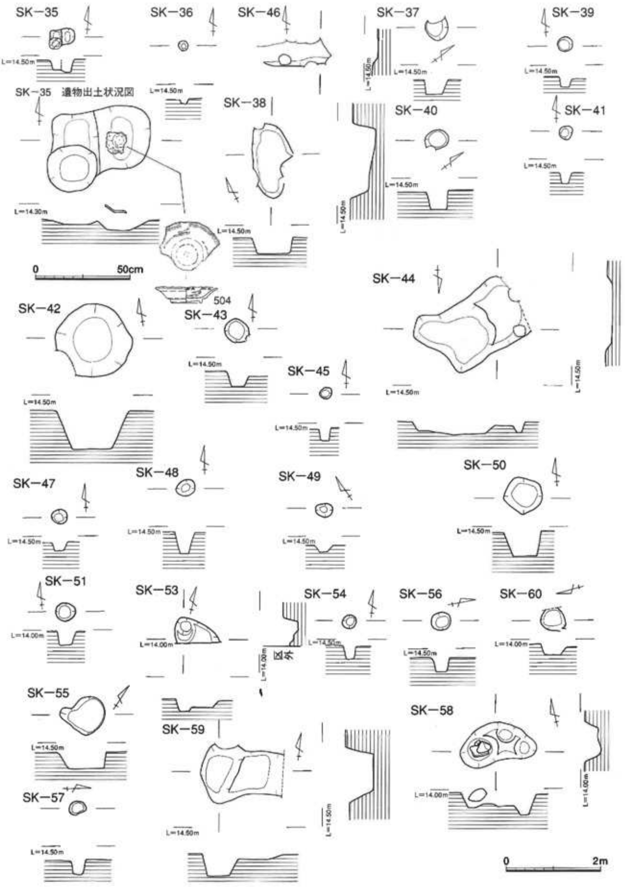
中世前期の山茶碗を中心に、中世後期の瀬戸美濃大窯製品や常滑製品を伴う遺構である。遺物を伴う遺構の大半は柱穴である。そこで、ここでは特筆される遺物が出土したもの、あるいは柱穴以外の土壙など、各時期の主要な遺構のみをとりあげて説明するが、柱穴を含め遺物を図化した遺構はすべて実測図を掲載している。

通例はこうした土壙を屋敷地の建物を構成する柱穴などと理解するが、調査区は先に紹介したＳＤ－２に囲まれており、また中世前期の墨書土器が出土するなど、通常の集落とは趣が異なる。

ＳＫ－35（第48図）　Ｏ－15区の南東部で検出された。遺構検出面からはごく浅い土壙である。ただし遺物が検出面よりも浮いて出土しており、本来の掘り込みはさらに上から成されていたのは明らかで、恐らく柱穴だろう。西側はほかの柱穴が重複している。平面形は楕円形を呈し、規模は南北35㎝、東西28㎝、深さは５㎝ほどである。埋土は暗茶褐色砂質土である。床面から10㎝ほど浮いて、龍泉窯系青磁稜花皿（第73図504）が出土している。稜花皿は最初から１／３ほどが欠損していた。遺構の時期は15世紀以降だろう。

ＳＫ－42（第48図）　Ｐ－17区の北西部で検出され、一部ほかの土壙が重複している。平面形はほぼ正円形を呈し、径1.6ｍ、深さ0.8ｍを測り、断面形は台形である。埋土は暗茶褐色砂質土で、一見するとＳＥ－１に似た印象を受ける。出土遺物として山茶碗の小皿、碗（第73図513～517）がまとまって出土しており、どの遺物も比較的残存状態は良い。遺構の時期は13世紀と考えられ、井戸に類似した水溜遺構の可能性がある。

ＳＫ－46（第48図）　Ｒ－15区の調査区端近くで検出した土壙で、溝状の浅く長い形状を呈する。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には山茶碗の碗のほか、土師器のロクロ成形皿があり（第73図521～523）、土師器皿の残存状態は良い。遺構の時期は12世紀後葉と考えられる。



第48図 土壙−6（中世前期・後期、1／20・1／80）

ＳＫ－52（第49図）　Ｎ－16・17区にまたがって検出された大型の土壙である。平面形は不整形で、南北の長さ8.6ｍ、東西の長さ５ｍを測る。床面は凹凸が著しいが、平均すれば10cm前後ときわめて浅い。数カ所に焼土が分布しており、炉のような印象を受ける。埋土は黒褐色砂質土である。中世の土師器片がまとまって出土したためこの時期の帰属としたが、埋土の特徴から、ＳＫ－17・18やＳＫ－20・21と同様の古代の土壙と重複している可能性がある。

ＳＫ－61（第49図）　Ｐ－16区の北端で検出された浅いピットである。平面形は円形を呈し、径20cm、深さ５cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。底面に接して土師器の皿１点（第73図537）が出土しており、遺構の時期は中世後期、15～16世紀だろう。地鎮遺構の可能性がある。

ＳＫ－62（第49図）　Ｐ－16区の西端で検出された土壙である。平面形は整った楕円形を呈し、規模は長径1.6ｍ、短径1.35ｍ、深さ0.9ｍを測り、断面形は箱形を呈している。埋土は暗茶褐色砂質土である。その形状から土壙墓の可能性もあるが、人骨は確認されなかった。出土遺物には瀬戸美濃産陶器の天目茶碗や擂鉢（第73図538～540）があり、遺構の時期は15世紀後葉と考えられる。

Ｃ．近世の土壙

近世の瀬戸美濃産陶器を中心に、染付を主体とする磁器や土師器を伴う遺構である。中世と同様に、近世の遺物を伴う遺構も大半は柱穴であり、付近が屋敷地として長期間利用されたことをものがたる。ここでは、中世の土壙と同様の方針により説明する。

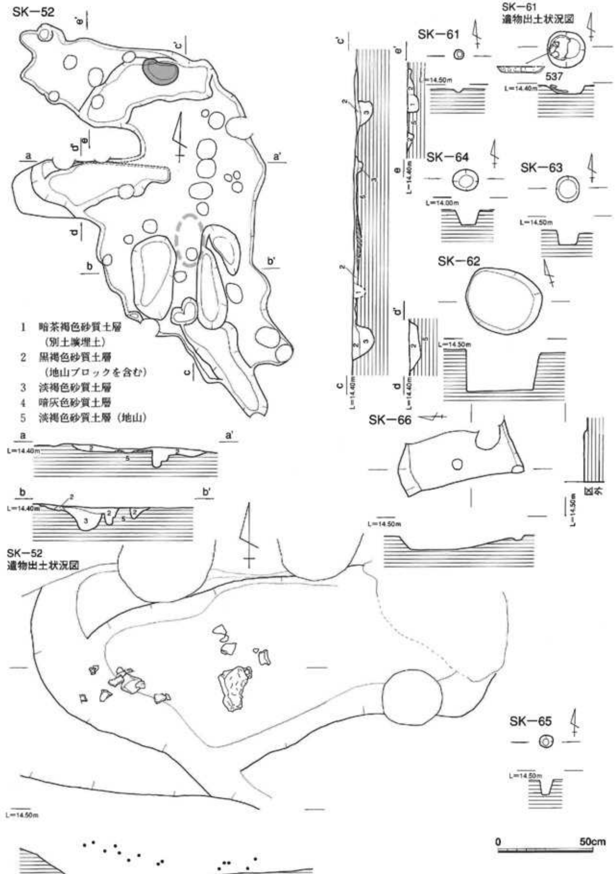
ＳＫ－68（第50図）　Ｏ－14区の東端付近、ＳＤ－２に重複して底面で検出された土壙である。ＳＤ－２埋土上面では検出されず、これに伴う遺構であろうか。平面形は長方形を呈し、長さ1.9ｍ、幅1.2ｍ、深さはＳＤ－２の底面から40cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。その性格は不明だが、まれに溝や堀の底に水溜用の土壙があり、本例もそうしたひとつではないかと考える。出土遺物には灰釉陶器の碗、瀬戸美濃産陶器の志野丸皿や半胴甕、磁器の染付碗など（第74図550～553）があり、遺構の時期は17世紀と考えられる。

ＳＫ－69（第50図）　ＳＨ－７の内部で検出された土壙で、３ヵ所の柱穴が集中した中心に、ほぼ完形の土師器の皿１点（第74図554）が出土しており、柱穴に伴う地鎮のためのものだろう。

ＳＫ－70（第50図）　０－16区の中央で検出された土壙である。平面形は楕円形を呈すると思われ、規模は東西65cm、南北50cm以上、深さ25cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。遺構内の東寄りに完形の土師器の皿１点（第74図555）が出土している。

ＳＫ－75（第50図）　Ｏ－20区の北寄りで検出された柱穴で、東側はカクランに切られている。平面形は楕円形を呈し、規模は南北50cm、東西35cm、深さ45cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。底面から20cm浮いた位置で挽き臼（第74図560）が出土しており、根石ではなく、柱の根固めとして使用されたものと考える。

ＳＫ－76（第50図）　Ｏ－18区の中央西寄りで検出された柱穴である。２ヵ所の柱穴が連結したような形状を呈しているが、これが本来の姿かどうかは分からない。平面形は長楕円形を呈し、規模は長さ90cm、幅45cmで、南北の端が柱穴として深くなる。このうち南側は深さ35cmを測り、建物の根石に転用された挽き臼（第74図561）が出土している。埋土は暗茶褐色砂質土である。



第49図 土壙−7（中世後期、1／20・1／80）

ＳＫ－77（第51図）　Ｐ－16区の中央西寄りで検出された柱穴である。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長径1.0ｍ、短径0.7ｍ、深さ30㎝を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。底面にほぼ接して挽き臼１点（第74図562）が出土しており、根石に転用されたものだろう。

ＳＫ－80（第50図）　Ｒ・Ｓ－14・15区の境界で検出された土壙で、北側は近世の溝ＳＤ－８に切られている。平面形は不整な方形を呈し、規模は南北3.4ｍ以上、東西3.1ｍ、深さ20㎝を測る。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には陶器の小坏（第75図565）があり、近世の遺構と考えるが、埋土の状況から古代以前にさかのぼる可能性がある。

ＳＫ－81（第51図）　Ｒ－16区で検出された不整形な土壙で、西側の一部が溝状のカクランに切られている。規模は南北6.9ｍ、東西4.5ｍ以上を測り、深さは最も深いところで40㎝である。埋土は黒褐色砂質土である。出土遺物には古墳時代終末期の須恵器をはじめ、土師器の半球形鍋や硯が出土している。遺構の時期は遺物から近世と考えるが、埋土の状況や須恵器の集中などから、古墳時代終末期にさかのぼる可能性がある。

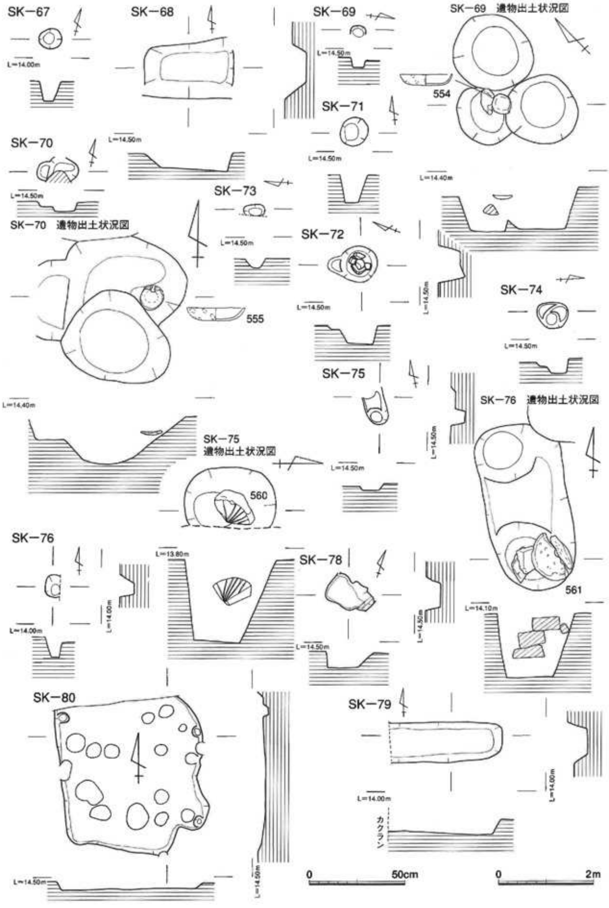
ＳＫ－85（第51図）　Ｓ・Ｔ－17区で検出された溝状に長く延びた土壙で、一部はＳＤ－８に切られている。規模は東西6.4ｍ以上、南北最大４ｍ、深さ55㎝を測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には瀬戸美濃産陶器の碗や皿、摺鉢、磁器の碗、土師器の鍋など（第75図586～599）、近世の陶磁器・土師器が多数出土している。遺構の時期は17世紀～19世紀まで及んでいる。長期間使用された廃棄土壙、または区画溝の一部だろう。

ＳＫ－91（第11・41図）　Ｓ・Ｔ－19区付近は段丘崖の斜面となっており、ここから多量の遺物が出土した。斜面は自然の傾斜ではなく、明らかに人為的な掘削によって土壙状を成しており、規模が大きいため全形は把握できない。この斜面の遺構をＳＫ－91とする。埋土は暗茶褐色砂質土または黒褐色砂質土で、貝殻なども含まれており、斜面を利用した廃棄土壙と考えられる。遺物には古墳時代の坏など混入品もあるが、大半は近世の陶磁器、土師器など（第76図600～621）で、時期は17世紀を中心としている。近世初頭に利用された遺構であろう。

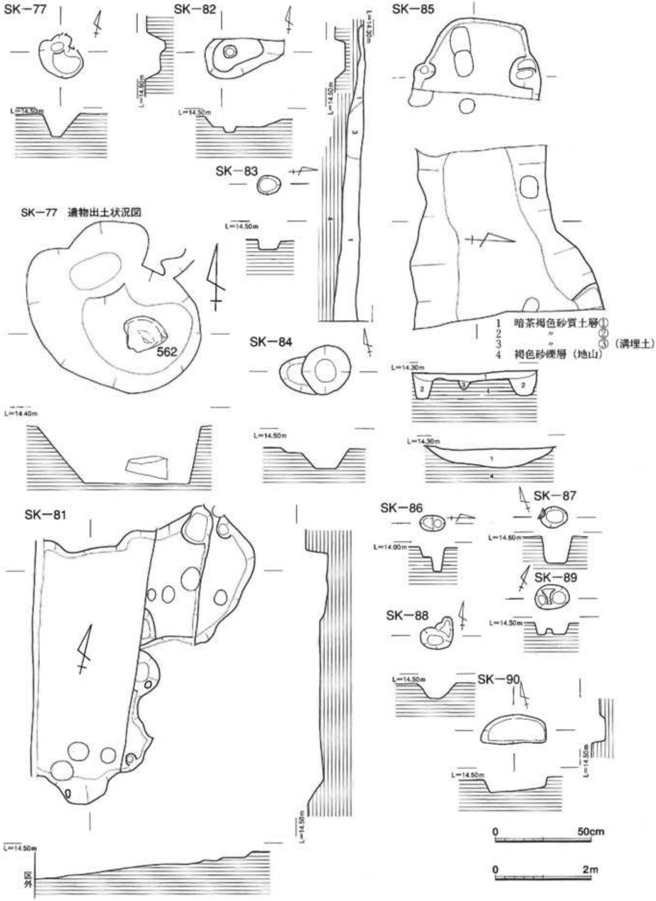
８．遺物包含層（黒褐色砂質土層）

重機を使用した表土剥ぎの段階で、Ａ区の西寄りのＭ・Ｎ－15・16区付近において、地山上に厚さ15㎝程度の黒褐色砂質土が分布することが判明した。これを掘り下げたところ、弥生時代後期前葉の遺物を主体とする多くの遺物が出土したためこれを遺物包含層とした。

遺物包含層の分布範囲は、重機による検出であったため不正確ではあるが、おおむね上記地区内の約15ｍ四方の範囲内におさまる。掘り下げの過程で遺構プランなどの検出に努めたが、把握することはできなかった。従って地山面まで掘り込みが達しない竪穴住居などの遺構が存在した可能性は否定できない。またこの付近のみに包含層が遺存した原因として、周囲に比べ地形がわずかに低く凹んでいることがあげられる。出土遺物には弥生時代後期前葉の土器をはじめ、古墳時代中期前葉の土師器、灰釉陶器、中世陶器、青磁碗、陶器類など（第77図622～650）があるが、弥生土器の出土量から、包含層自体はそのころ形成されたものであり、他は後世の掘り込みに伴う混入品と考える。



第50図 土壙−8（近世、1／20・1／80）



第51図　土壙−9（近世　1／20・1／80）